

# 2023 年度 ボランティアセンター 年間活動報告書

～ ボランティアセンター20 周年記念～



フェリス女学院大学

# 2023 年度ボランティアセンター年間活動報告書 目次

|                          |             |   |
|--------------------------|-------------|---|
| はじめに「ボランティア活動の更なる発展に向けて」 | センター長 知足 章宏 | 1 |
|--------------------------|-------------|---|

## フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業

|                      |   |
|----------------------|---|
| 1. 中期計画（21-25PLAN）   | 2 |
| 2. 2023 年度の活動をふりかえって | 3 |

## 学生スタッフ・プロジェクトスタッフ活動報告

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 1. 学生スタッフの活動               | 12 |
| 2023 年度ボランティア説明会           | 12 |
| ボランチ開催                     | 14 |
| 学生スタッフ委嘱式                  | 14 |
| 海外スタディツアー報告会               | 14 |
| 学生スタッフ研修会                  | 15 |
| 大学祭                        | 18 |
| 2. 演奏ボランティアチームの活動          | 19 |
| Thank you concert          | 19 |
| ボランティアセンター演奏会（於コミュニティだんだん） | 19 |
| 高齢者サロン十日会                  | 20 |
| 第 1 回こころを彩るコンサート           | 20 |
| めぐみ幼稚園クリスマス祝会              | 21 |
| 3. アンネのバラチームの活動            | 22 |
| アンネのバラの由来                  | 22 |
| 取材（横浜ケーブルテレビジョン、東京新聞、読売新聞） | 23 |
| アンネのバラ記念礼拝、植樹記念礼拝          | 24 |
| ポブリづくり体験（ミニオープンキャンパス）      | 27 |
| アンネのバラ育成のための研修会            | 28 |
| アンネのバラ 20 周年パンフレット         | 29 |

## 主なボランティア活動

|                    |    |
|--------------------|----|
| 1. NPO インターンシップ    | 30 |
| 2. 国際機関実務体験プログラム   | 31 |
| 3. 学習支援ボランティア      | 32 |
| 4. その他             | 35 |
| 泉区役所家計改善啓発リーフレット作成 | 35 |
| 泉区社会福祉大会           | 35 |

|                                          |                 |    |
|------------------------------------------|-----------------|----|
| 泉区ファン交流会                                 |                 | 36 |
| ジョイントコンサート（於横浜緑園高等学校）                    |                 | 36 |
| 日本赤十字献血バス、                               |                 | 37 |
| あーすフェスタかながわ 2023                         |                 | 37 |
| <b>宗教センター・国際センター・ボランティアセンター合同企画</b>      |                 |    |
| アジア学院スタディツアー報告                           |                 | 38 |
| アジア学院スタディツアーに込められた「For Others」の精神        | 宗教センター 相澤 一     | 40 |
| <b>学生による活動報告</b>                         |                 |    |
| <b>【演奏ボランティア】</b>                        |                 |    |
| 『第1回こころを彩るコンサート』の企画運営・演奏                 | 音楽芸術学科 4 年      | 41 |
| <b>【学習支援】</b>                            |                 |    |
| 学習支援ボランティア活動報告 ～小学校での私の体験～               | 英語英米文学科 3 年     | 43 |
| <b>【NPO インターンシップ】</b>                    |                 |    |
| NPO インターンシップ報告（横浜 NGO ネットワーク）            | 国際交流学科 1 年      | 44 |
| NPO インターンシップ報告（ピッピ・親子サポートネット）            | 音楽芸術学科 1 年      | 46 |
| NPO インターンシップ報告（横浜 NGO ネットワーク）            | 音楽芸術学科 1 年      | 49 |
| NPO インターンシップ報告（アクションポート横浜）               | コミュニケーション学科 2 年 | 51 |
| <b>【国際機関実務体験プログラム】</b>                   |                 |    |
| 国際機関実務体験プログラム（IUC）報告（夏期）                 | 英語英米文学科 4 年     | 53 |
| 国際機関実務体験プログラム（YOKE）報告（春期）～横浜市の多文化共生に触れて～ | 国際交流学科 1 年      | 56 |
| <b>【その他】</b>                             |                 |    |
| ボランティア活動報告（カラバオの会）                       | 日本語日本文学科 2 年    | 59 |
| ボランティア活動報告                               | 国際交流学科 4 年      | 62 |
| ボランティア活動報告（第20回世界をつなぐ国際子どもサマーキャンプ）       | 国際交流学科 4 年      | 65 |
| <b>来室者アンケート</b>                          |                 | 68 |
| <b>ボランティアセンター資料</b>                      |                 |    |
| ボランティアセンター規程                             |                 | 72 |

|                   |    |
|-------------------|----|
| ボランティアセンター運営委員会規程 | 74 |
| ボランティアセンター運営方針    | 76 |
| 2023 年度活動実績       | 77 |

|          |    |
|----------|----|
| メディア掲載一覧 | 78 |
|----------|----|

|      |                |    |
|------|----------------|----|
| おわりに | コーディネーター 上條 直美 | 79 |
|------|----------------|----|

表紙写真・裏表紙写真：アンネのバラ

# はじめに

- ボランティア活動の更なる発展に向けて -

ボランティアセンター長 知足 章宏

2023 年度よりボランティアセンター長を務めております知足と申します。2023 年度は、これまで新型コロナ禍で生じてきた多くの制限が解かれ、学生たちも活発な活動を行うようになりました。センターの学生スタッフ、本学学生たちも様々なボランティア活動に取り組んでおります。日ごろから学生たちの活動にご理解、ご協力頂いている関係の皆様、心より感謝を申し上げます。

教育の現場に立っている一教員として、今後、学生たちのボランティア活動をより活発に展開するために何が必要か、改めて考えております。一部の学生は活発な活動を行いますが、ボランティアに参加することに躊躇する学生も多いように思います。学生たちが自発的にボランティアに参加しない要因としては、ここで結論付けることはできませんが、やはり日々の生活における優先事項として上がってこないことは確かです。しかし、授業等から得た感覚では、環境や貧困など世界の様々な問題、地域社会、他者のために何かをしたいという学生たちは今も昔も変わらず大多数です。このような学生たちのモチベーションと実動の乖離をどう埋めることができるでしょうか。

簡単な答えはありませんが、やはり重要なことは、学生達の声に耳を傾けることかと思えます。ボランティアとはいえお金がかかってしまう（交通費など）から何とかしてほしい、やってみたいけども軽い程度でやりたい、など、率直な見解も聞いたことがあります。最近、学生達が社会貢献活動を実行するための費用をクラウドファンディングで獲得するといったことも、めずらしいことではなくなってきました。センターにおきましても、新しいボランティア、参加の形を学生たちが考え、実行することも非常に重要となっています。

本報告書には、2023 年度における当センターの活動内容、学生たちのボランティア活動報告などが記されております。活動報告では、学生たちが実際にボランティア活動を行った理由、経験したこと、課題・成果など、今日におけるボランティア活動の意義を再考するうえで重要な点が示されていると思います。ご高覧いただけますと幸いです。

## ・ボランティアセンターの目的と事業（2023 年度）

### 1 . 中期計画（21 - 25PLAN）

ボランティアセンターは、大学中期計画「21 - 25PLAN」の以下の 3 つの中期目標に基づいて事業計画を策定し、実施しています。

| 中期計画名称                       | 事業名                                                                                                                                      | 2023 年度の成果                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 「For Others」の理念に基づく人材育成事業の充実 | 1. 国内外の課題解決を図る人材育成（学生スタッフ・コーディネーターの育成）<br>2. NPO 等との地域の課題解決への取り組み<br>3. 広報・啓発活動の更なる強化/認知度向上と行動の促進・拡充<br>4. ボランティアセンター活動報告書の作成            | 1. 学生スタッフ・コーディネーターの育成について、計 2 回の学生スタッフ研修会を実施。第 1 回は「多文化共生」「横浜寿町を知る」をテーマに、第 2 回は学生スタッフ同士の交流を深め、1 年間をふりかえり、次年度計画をたてることを目的に開催されました。<br>2. NPO インターンシップ（NPO 法人アクションポート横浜）を通じて 6 名の学生が地域 NPO にて活動を行った。<br>3. ボランティア情報を発信するメールへの登録制度の存在を周知し、情報が欲しい学生へのアプローチを強化した。また、情報発信頻度も高めた。新入生オリエンテーション時の説明会、秋の講習会、大学公式ブログへの活動報告掲載、学生スタッフによる広報用動画の制作、SNS の発信を行った。<br>4. 学生の活動報告レポートの掲載を復活し、学生の活動報告の場と学びを深める場としての活動報告書本来の目的を再確認した。 |
| 社会的課題への取り組み機会の拡充             | 1. 地域・地方自治体・市民社会との連携<br>2. 被災地支援の拡充<br>3. 他大学のボランティアセンターとのネットワークの拡充、プロジェクトの実施<br>4. 学生によるボランティアセンター及びボランティアに関する広報の拡充<br>5. SDGs 及び ESD に | 1. 前年度に引き続き、泉区社会福祉協議会ボランティアセンターの運営委員を担った。また、2022 年度に泉区と本学の連携・協力に関する基本協定の締結が結ばれ、区役所を通じたボランティア募集が増加した。<br>2. 被災地支援ボランティア活動補助費の支給を実施した。<br>3. 東京ボランティア・市民活動センターが主催する関東地区大学ボランティアセンターネットワーク「ほんわかねっと」の研究会に参加し、他大学のボランティア支援の様子を見学した。<br>4. アンネのバラ 20 周年を記念し、パンフレット作成                                                                                                                                                  |

|                     |                                               |                                                                                                                              |
|---------------------|-----------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                     | 関するプロジェクト<br>の拡充<br>6. 国際協力・地球規模<br>の課題への取り組み | や SNS の発信などを行った。<br>5. 外部団体からの SDGs 及び ESD に関する情報を積極<br>的に一般学生に向けて発信、提供した。<br>6. 国際協力・地球規模の課題に関する情報を積極的に<br>一般学生に向けて発信、提供した。 |
| 意思決定を担う<br>女性への人材育成 | 1. 女性のエンパワ<br>メントの推進                          | 具体的な企画は実施されなかったが、ボランティア<br>センター学生スタッフの卒業生とのつながりの中<br>で、女性の職業選択やライフコースについて経験共<br>有する機会を模索した。                                  |

## 2 . 2023 年度の活動をふりかえって

フェリスのボランティアセンターは、2023 年 4 月で設立されてから丸 20 年たちました。大学教育を取り巻く状況は、アクティブラーニングやサービスマーケティング、授業でのフィールドワーク、そしてインターンシップなど体験活動の多様化によって大きく変化し、コーディネーターとしてはボランティア活動との境目や重なりなど、その意義が改めて問われていることを実感した 1 年でした。

新型コロナウイルス感染症は 2023 年 5 月から 5 類感染症になり、感染時の行動制限がなくなり対面の活動が増えるにしたがい、大学近隣地域から大学生ボランティア募集の申し込みが急増しました。以下、中期計画（21 - 25PLAN）に沿って 2023 年度の活動をふりかえってみたいと思います。

### 1 ) 「For Others」の理念に基づく人材育成事業の充実：学生スタッフの活動と全学生に対する情報提供の充実

学生の多忙化や就活の早まりなどによってボランティア活動に対する考え方も変化し、長期継続より単発のイベント型への参加が好まれたり、安心・安全が担保されることが重視されることから事前説明がより詳細に必要になったり、活動の環境が整っていることが求められたりするようになりました。

こうした変化に対応するため、ひとつには学生スタッフを「運営スタッフ」「プロジェクトスタッフ（演奏ボランティア）」「プロジェクトスタッフ（アンネのバラ育成）」に分け、以前のようにボランティアセンターの事業全体に関わる学生スタッフ以外に、興味関心のある分野のみに関わられるようにしました。

情報提供については、情報内容を充実させるため、外部団体に対してはウェブサイトから google forms で細かい情報を送ってもらえるような整備を行いました。提供に関しては、フェリスパスポートでの案内に加え、情報提供メール（フェリスメールで情報が受け取れるように登録する制度）の発信頻度を高め、週に 2、3 回の情報発信を心がけました。約 220 名の学生が登録しています。

コロナ禍で 3 年ほど中断された NPO インターンシッププログラムと国際機関実務体験プロ

グラムも再開され、多くの学生が参加することができました。CLA 棟 3 センター（宗教センター、バリアフリー推進室、ボランティアセンターに加え国際センター）合同プログラムとしてのアジア学院スタディツアー 2 回目が実施され 9 名の学生が参加し、実施後も積極的に活動に参加してくれるようになりました。

## 2) 社会的課題への取り組み機会の拡充：地域との連携

大学と泉区の連携協定締結により、学長室において泉区役所との連携事業が増えた関係で、泉区役所からの情報提供がボランティアセンターを通して発信されるようになり、「知っておきたい一人暮らしのお金のハナシ」というリーフレット制作に学生が参加するなど活動範囲が広がりました。11 月には日本赤十字社神奈川県赤十字血液センターとの連携で献血バスの受け入れを行い、約 50 名の学生・教職員が参加しました。

年間約 100 名の学生がボランティア情報を求めてボランティアセンターを訪れてくれます。その多くが何かしらの活動につながっていることは大変嬉しいことです。より多様な情報提供と活動のマッチングに向けて教職員、先輩学生の経験、アドバイスを求めていきたいと思えます。

### (1) センター実施業務

一般学生へのボランティア活動に関する情報提供・相談

|                |               |
|----------------|---------------|
| ボランティアセンター開室時間 | 月～金 10 時～17 時 |
|----------------|---------------|

#### a. 情報提供～メール登録システム

外部団体から送られてくるボランティア情報を、内容を吟味しスクリーニングしたうえで情報提供している。

発信方法としては、情報を希望する学生にメールアドレスを登録してもらい、メールで送信しているほか、内容によってはフェリスパスポートで全学生に向けて募集を行っている。学内掲示、ボランティアセンター内資料の配架等を通じて閲覧もできる。

・2023 年度登録者数：約 220 名

ボランティア募集の件数は把握できているだけで 30 件、依頼の主体と活動分野は次頁の通りである。

【外部団体からの依頼状況】

| 依頼主体         | 件数 | 活動分野             | 件数 |
|--------------|----|------------------|----|
| NPO          | 11 | 演奏ボランティア         | 5  |
| 高齢者施設        | 5  | 野外活動             | 3  |
| 地域ケアプラザ      | 5  | 地域イベント           | 3  |
| 保育園          | 1  | 高齢者              | 3  |
| 小学校          | 2  | 子ども学習支援          | 3  |
| 各種イベント実行委員会  | 2  | 子ども居場所           | 1  |
| 行政（環境省、神奈川県） | 2  | 子どもイベント          | 1  |
| 区民センター       | 1  | 障がい児             | 1  |
| 農協           | 1  | 人権セミナー           | 1  |
| 計            | 30 | スタディツアー（福島、環境問題） | 1  |
|              |    | スポーツ             | 2  |
|              |    | 骨髄バンク            | 1  |
|              |    | 動物愛護             | 1  |
|              |    | 農業体験             | 1  |
|              |    | 保育               | 1  |
|              |    | その他              | 2  |
|              |    | 計                | 30 |

b. 説明会・相談会

年に2回のボランティアセンターについての説明会のほか、随時、各種説明会や相談会を実施している。

| 種別                                     | 参加者数     |
|----------------------------------------|----------|
| ボランティアセンター・バリアフリー推進室合同説明会<br>（4月3日、4日） | 103名     |
| ボランチ（新入生勧誘期間4月20日～5月12日）               | 30名      |
| 国際機関実務体験プログラム説明会 夏期5月26日               | 6名       |
| 春期11月10日                               | 8名       |
| ボランティア活動科目履修説明会（5月12日）                 | 5名       |
| 秋のボランティア講習会（10月19日）                    | 4名       |
| ボランティア活動科目履修説明会（10月23日）                | オンデマンドのみ |
| 海外スタディツアー報告会（10月31日）                   | 7名       |

## ボランティア活動科目履修の相談業務

履修相談の結果、履修登録に結び付いた学生と活動内容は以下の通りである。

| 科目名                    | 履修者             | 前期  | 後期  | 活動内容                            |
|------------------------|-----------------|-----|-----|---------------------------------|
| ボランティア活動 3<br>(270 時間) | 日本語日本文学科<br>4 年 |     | 1 名 | 横浜 NGO ネットワーク                   |
| ボランティア活動 2<br>(90 時間)  | 日本語日本文学科<br>4 年 | 1 名 |     | 学習支援：厚木市立東名中学校                  |
|                        | 国際交流学科 4 年      |     | 1 名 | 横浜港北国際交流ラウンジ<br>(横浜市国際交流協会)     |
|                        | 国際交流学科 4 年      |     | 1 名 | BSC ウォータースポーツセンター               |
|                        | 日本語日本文学科<br>2 年 |     | 1 名 | カラバオの会                          |
| ボランティア活動 1<br>(45 時間)  | 音楽芸術学科 3 年      | 1 名 |     | 演奏ボランティア：コミュニティだんだん             |
|                        | 国際交流学科 3 年      | 1 名 |     | 学習支援：特定非営利活動法人あすなろ瀬谷区学習支援教室このは塾 |

## ボランティア活動保険登録手続きの代行

学生スタッフ・プロジェクトスタッフ 20 名

一般学生 20 名

## 学内組織・ボランティア系団体との連携

今年度も宗教センター、国際センターと共同で、アジア学院スタディツアーを開催した。

## 学外組織との連携

### a. NPO インターンシップ系ボランティア (2009 年度開始事業)

NPO 法人アクションポート横浜との連携によるインターンシップ型ボランティア活動に学生を派遣している。今年度は 8 名の学生を派遣した。

### b. 国際機関実務体験プログラム (2005 年度開始事業)

公益財団法人横浜市国際交流協会 (YOKE) を通じて横浜市内 6 大学が参加。国際機関・国連機関での実務体験活動に学生を派遣。

< 派遣団体・派遣期間・派遣学生 >

夏期：IUC アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

2023 年 8 月 28 日～9 月 14 日

英語英米文学科 4 年 1 名

春期：公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）

2024 年 2 月～3 月

国際交流学科 3 年 1 名・1 年 1 名

c. 泉区社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会

運営委員として参加した。また、ボランティアセンター同士の協働プログラムについて模索した。

d. 日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）会員

JVCA 正会員登録

職員向け研修会等に参加

市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会

2024 年 2 月 23 日（金）～24 日（土） ハイブリッド開催

e. 関東地区大学ボランティアセンターネットワーク（ほんわかねっと）への参加

関東近県約 12 の大学ボランティアセンターや支援室等が参加しているネットワークで、東京ボランティア・市民活動センターが事務局となっている。年に 3 回程度の研究会開催等を実施している。

学外団体への寄付・募金

a. 寿地区センター（タオル等のバザーへの寄付）

b. 学校法人アジア学院（古切手）

c. NPO 法人ともにあゆむ / 世界の子どもにワクチンを日本委員会（ペットボトルキャップ）

（ 2 ） 学生スタッフの活動

| 種類                             | 学科・学年・人数                                                                                                                            |
|--------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 学生スタッフ（10 名）                   | 音楽芸術学科 4 年 3 名<br>音楽芸術学科 2 年 1 名<br>音楽芸術学科 1 年 4 名<br>国際交流学科 3 年 1 名<br>日本語日本文学科 2 年 1 名<br>日本語日本文学科 1 年 2 名<br>コミュニケーション学科 1 年 1 名 |
| プロジェクトスタッフ<br><アンネのバラチーム>（7 名） | 国際交流学科 3 年 1 名<br>音楽芸術学科 3 年 1 名<br>コミュニケーション学科 2 年 1 名<br>コミュニケーション学科 1 年 2 名                                                      |

|                                   |                                                                      |
|-----------------------------------|----------------------------------------------------------------------|
|                                   | 日本語日本文学科 1 年 2 名                                                     |
| プロジェクトスタッフ<br>＜演奏ボランティアチーム＞（13 名） | 音楽芸術学科 4 年 5 名<br>音楽芸術学科 3 年 2 名<br>音楽芸術学科 2 年 1 名<br>音楽芸術学科 1 年 5 名 |

## 広報

SNS（Facebook、Instagram、X）の活用

## 研修会の企画・運営

### 【第 1 回研修会】

日程：2023 年 9 月 19 日（火）および 9 月 21 日（木）

場所：かながわ国際交流財団、外国人すまいサポートセンター、寿地区センター、神奈川県立歴史博物館等

## 大学祭への参加

11 月 3 日、4 日にテーマ「Take Flight～羽ばたく～」のもとで大学祭が開催された。ボランティアセンターも参加。7 号館 7104 教室で活動を行った。

2023 年度は、SDGs よこはま CITY とコラボ企画を行い、SDGs よこはま CITY に加盟する国際協力 NGO13 団体の活動紹介パネル展示とクラフト・手工芸品・フェアトレード商品の販売を行い、多くの来場者にアピールした。また、参加団体のうち数団体が大学祭に参加され、活動紹介ミニトーク・交流会の時間を持ち、学生と NGO の交流の場を作ることができた。

ボラセンの学生活動を紹介するパネルの展示およびアジア学院スタディツアーのパネルを学生が制作し展示した。



大学祭展示パネル

使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付（2008 年度開始事業）

使用済切手、書き損じはがきなどを回収し、学校法人アジア学院、日本キリスト教医療協

力会、シャプラニール＝市民による海外協力の会などへ寄付を行っている。今年度は、アジア学院スタディツアーを実施したため、訪問の際に持参し、寄付を行った。

#### ペットボトルキャップの回収（2008 年度開始事業）

緑園キャンパス、山手キャンパス合わせて 26 か所に回収 BOX を設置し、定期的に回収を行っている。回収されたキャップは、搬入先として NPO 法人とともにあゆむに引き取ってもらい、換金したものを JCV（認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会）に寄付するという仕組みで、寄付を実施している。

キャップアクションキャンペーン 2023 が 6 月 26 日～7 月 17 日に行われた。Instagram にペットボトルキャップが写った写真や動画に「#キャップアクション」を付けて参加すると、協賛企業各社を通して 1 人分のワクチン支援につながるというキャンペーンで、フェリスボラセンとして参加をした。

| 集計日     | 回収数       | ポリオワクチン   | 回収重量      | CO 削減量     |
|---------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 2010 年度 | 45,600 個  | 57.00 人分  | 114.0kg   | 359.10kg   |
| 2011 年度 | 60,480 個  | 75.60 人分  | 151.2kg   | 476.28kg   |
| 2012 年度 | 80,539 個  | 97.30 人分  | 194.5kg   | 612.68kg   |
| 2013 年度 | 43,344 個  | 50.40 人分  | 100.8kg   | 317.52kg   |
| 2014 年度 | 58,093 個  | 67.50 人分  | 135.1kg   | 425.57kg   |
| 2015 年度 | 39,904 個  | 46.40 人分  | 92.8kg    | 292.32kg   |
| 2016 年度 | 41,495 個  | 48.25 人分  | 96.5kg    | 303.98kg   |
| 2017 年度 | 36,808 個  | 42.80 人分  | 85.6kg    | 269.64kg   |
| 2018 年度 | 37,152 個  | 43.20 人分  | 86.4kg    | 272.16kg   |
| 2019 年度 | 36,808 個  | 42.80 人分  | 85.6kg    | 269.65kg   |
| 2020 年度 | 24,854 個  | 28.90 人分  | 57.8kg    | 182.07kg   |
| 2021 年度 | 34,271 個  | 39.85 人分  | 79.7kg    | 251.06kg   |
| 2022 年度 | 30,788 個  | 35.80 人分  | 71.6kg    | 225.54kg   |
| 2023 年度 | 30,788 個  | 35.80 人分  | 71.6kg    | 225.54kg   |
| 累計      | 600,924 個 | 711.60 人分 | 1,423.2kg | 4,483.11kg |

\* 2kg（860 個）でポリオワクチン 1 人分が購入できる。

（ペットボトルキャップが軽量化され、2012 年 9 月 1 日より 1kg=400 個より 430 個に変更された）

\* ペットボトルキャップは、仮にごみとして焼却されると 1kg で 3,150g の二酸化炭素が発生します。



カップアクションキャンペーン 2023

学内掲示ポスター

カップの収集・洗浄にご協力下さった方々に心より感謝申し上げます。

## 寿町バザーへの支援

バザーの献品を促進するためポスターを作成し、学内に掲示した。



## その他の企画

5月9日(火) OGD 交流会(オンライン)

現在教員をしている OG を招きオンライン交流会を行った。教職課程を履修している学生スタッフを中心に 5 名が参加。

12月6日(水) 12月10日の世界人権デーにちなみ映画『ガザ 素顔の日常』を鑑賞。

### (3) プロジェクトチームの活動

演奏ボランティアチーム

7月26日(水)日頃大学でお世話になっている方々へ「Thank you concert」

8月31日(木)14時~15時 ボランティアセンター演奏会(於コミュニティだんだん)

9月22日(木)10時~11時 泉区社会福祉協議会 高齢者サロン「十日会」

10月7日(土)13時～「こころを彩るコンサート」

12月9日(土)めぐみ幼稚園クリスマス祝会

アンネのバラチーム

バラ手入れシフト（前期） 火曜日 2 限 プロジェクトスタッフ 2 名

金曜日 2 限 プロジェクトスタッフ 3 名

11 月 11 日（土） イングリッシュガーデン訪問講習会

< その他の活動 >

- ・ アンネのバラパンフレット（20 周年記念）制作

#### （４）アジア学院スタディツアー

実施日：6 月 10 日（土）13 時 30 分 那須塩原駅集合～6 月 11 日（日）15 時解散

受入・場所：学校法人アジア学院（栃木県那須塩原市西那須野）

参加者：国際交流学科 3 年 1 名

国際交流学科 2 年 1 名

英語英米文学科 2 年 1 名

国際交流学科 1 年 4 名

音楽芸術学科 1 年 1 名

英語英米文学科 1 年 1 名

共催：宗教センター、国際センター、ボランティアセンター

# 学生スタッフ・プロジェクトスタッフ活動報告

## 1. 学生スタッフの活動

### 2023 年度ボランティア説明会

#### < 新入生向けボランティア説明会 >

第 1 回 4 月 3 日 ( 月 ) 16 : 05 ~ 16 : 35 ( Zoom ) 参加者数 44 名、アンケート回収数 20 名

第 2 回 4 月 4 日 ( 火 ) 11 : 00 ~ 11 : 30 ( Zoom ) 参加者数 59 名、アンケート回収数 29 名

今年度もバリアフリー推進室と合同で、オンラインにて実施しました。新入生を中心に、2 日間で 103 名の学生が参加しました。司会は両日とも学生スタッフ ( 音楽芸術学科 2 年 ) が担当しました。

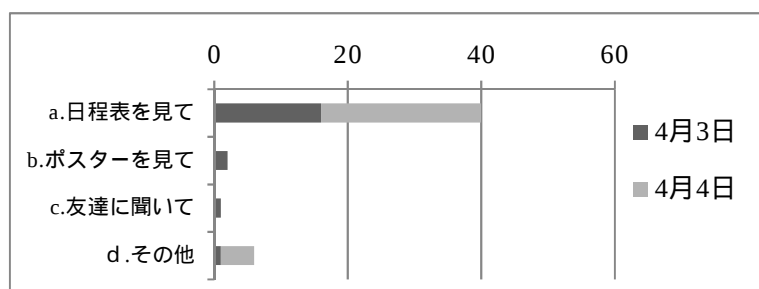
#### < 秋のボランティア講習会 >

10 月 19 日 ( 木 ) 12 : 20 ~ 13 : 00 ( 対面 / 録画視聴 ) 参加者数 9 名、アンケート回収数 2 名

#### 【ボランティア説明会アンケート回答数】

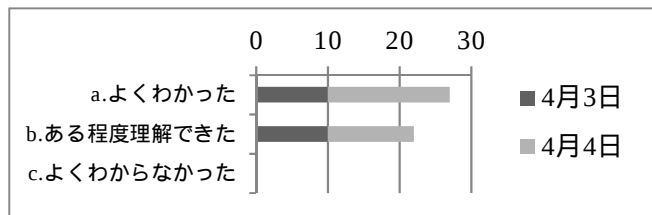
| 実施日       | 学年  | 英文 | 日文 | コミュ | 国際 | 音芸 | 学年別計 | 回収数計 |
|-----------|-----|----|----|-----|----|----|------|------|
| 4 月 3 日   | 1 年 | 5  | 6  | 3   | 6  | 0  | 20   | 20   |
|           | 2 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
|           | 3 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
|           | 4 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
| 4 月 4 日   | 1 年 | 3  | 4  | 7   | 7  | 8  | 29   | 29   |
|           | 2 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
|           | 3 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
|           | 4 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
| 10 月 19 日 | 1 年 | 1  | 0  | 0   | 1  | 0  | 2    | 2    |
|           | 2 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
|           | 3 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
|           | 4 年 | 0  | 0  | 0   | 0  | 0  | 0    |      |
| 合計        |     | 9  | 10 | 10  | 14 | 8  | 51   | 51   |

#### 1. 今日の説明会はどのように知りましたか？

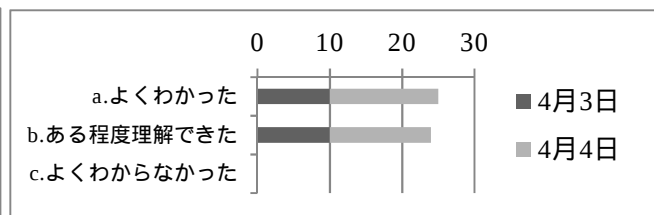


## 2. 今日の説明会に参加して、理解できましたか？

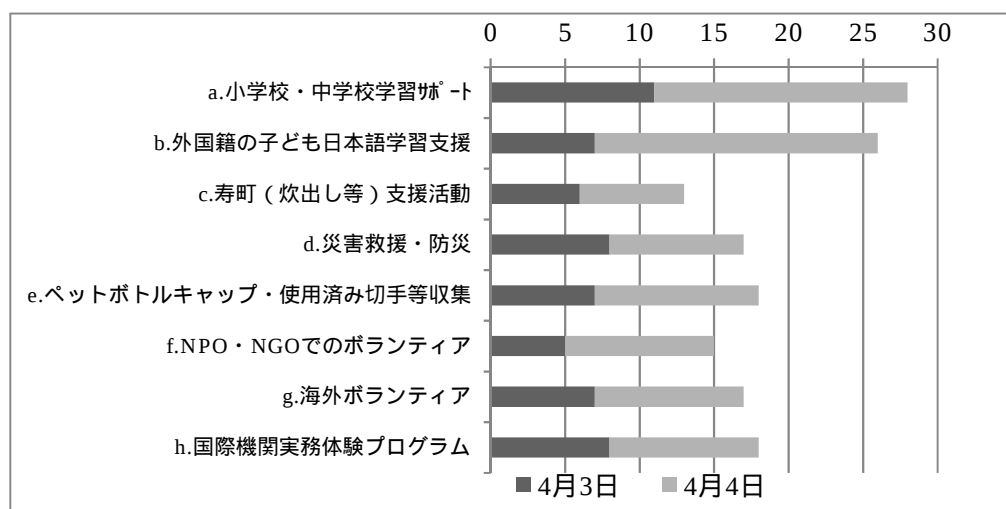
### 【ボランティアとは？】



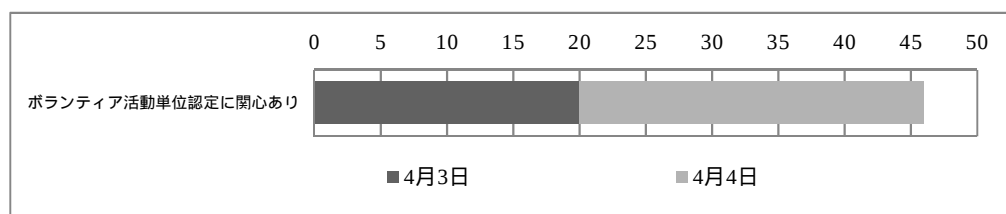
### 【ボランティアセンターについて】



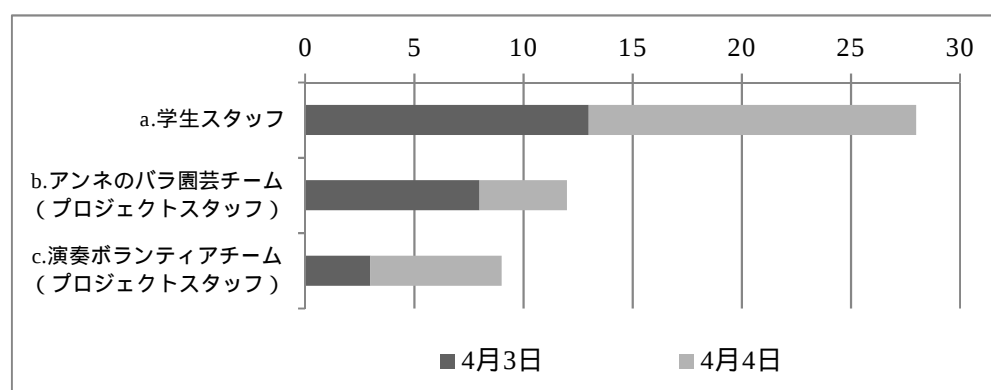
## 3. 紹介されたプロジェクトに興味を持った活動、参加してみたい活動はありますか？ (複数回答可)



## 4. ボランティア活動の単位認定について、関心はありますか？



## 5. ボラセンでスタッフをしてみたい方は、どれに興味がありますか？



## ボランチ開催

新入生新歓期間である4月20日(木)～5月12日(金)の昼休みに、ボランチを開催しました。30名(1年生24名、2年生2名、3年生3名、4年生1名)の学生が来室し、ボラセンでの活動やボランティアについて紹介しました。

## 学生スタッフ委嘱式

5月19日(金)昼休みに、ウエルカムセンターにて学生スタッフ及びプロジェクトスタッフ、プロジェクトコーディネーターに対する本年度の委嘱式を実施し、センター長から委嘱状が授与されました。新学生スタッフは、1年生7名、3年生1名で、継続スタッフ11名と合わせて19名で新年度をスタートしました。



## 海外スタディツアー報告会

10月31日(火)昼休みに、ACEF(アジアキリスト教教育基金)主催のバングラデシュスタディツアーに参加した学生による報告会を開催しました。ACEF事務局長の柳原さつき氏をお招きし、団体についてや、バングラデシュの教育支援活動についてご紹介いただきました。また、スタディツアーに参加した国際交流学科3年生1名と2年生1名から、スタディツアーの概要と学び、感想をお話いただき、とても充実した会となりました。司会は学生スタッフ(コミュニケーション学科1年)が担当しました。



## ボランティアセンター学生スタッフ研修会

### < 事前勉強会 >

日時：9月19日（火）14時～15時30分

場所：公益財団法人かながわ国際交流財団

講師：財団職員 前田 桃子氏

参加者：音楽芸術学科4年3名、3年1名、1年1名、日本語日本文学科1年2名  
知足センター長、上條コーディネーター、職員2名 （計11名）

### < 研修会 >

日時：9月21日（木）9時45分～19時

講師：かながわ外国人すまいサポートセンター事務局長 柳 晴実（リュ チョンシル）氏

寿地区センター主事 汀 なるみ氏

炊き出しの会 近藤 昇氏

参加者：音楽芸術学科4年3名、国際交流学科3年1名、音楽芸術学科2年1名、コミュニケーション学科1年1名、日本語日本文学科1年1名、音楽芸術学科1年1名  
かながわ国際交流財団 前田様  
知足センター長、上條コーディネーター、職員2名 （計13名）

### < 9/21 スケジュール >

|             |                                                                               |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| 9:45        | みなとみらい線馬車道駅 集合                                                                |
| 10:00-11:00 | 神奈川県立歴史博物館見学                                                                  |
| 11:30-12:45 | 昼食                                                                            |
| 13:00-14:30 | 特定非営利活動法人かながわ外国人すまいサポートセンター訪問                                                 |
| 15:00-16:30 | 寿地区センター訪問                                                                     |
| 17:30-19:30 | かながわ労働プラザでふりかえり会<br>・今日のふりかえり<br>・前期活動のふりかえり<br>・後期の活動（大学祭や第2回研修会など）についての話し合い |
| 19:30 頃     | 解散                                                                            |

本研修ではフェリスの生まれた横浜の開港の歴史に触れる事、ボランティアセンター設立の原点「平和・人権」、多文化共生の歴史と港湾労働者の歴史について知る事を目的とし、在住外国人を支援しているNPO すまいサポートセンターの訪問見学と、寿町の寿地区センターを訪問しました。また研修会へ行く前に、かながわ国際交流財団にて事前勉強会を行い、神奈川県に暮らす外国人の現状について学びました。

### 【ふりかえり会での学生の感想】（一部抜粋）

#### 1. かながわ国際交流財団 前田さんのお話（9月19日）

印象に残ったことなど

・日本語に壁を感じている方々（労働者）の現状を知ることができてとても良かった。やはり働いているとコミュニケーションから日本語も学べる（日本人→海外へ行っても）と考えていましたが、学びの場がないと習得が難しいのだと感じました。

- ・外国人の介護保険の問題について
- ・私も海外の言葉を学ぶ身として学習できる場を設けていただけることはとてもありがたいと思いました。しかし、誰もが不自由なく学べる環境ではなくて働きながら生活を営みながら学ぶことの難しさを感じました。そんな中で、日本人でも困難な契約を交わすことは不安でしかないので、サポートの必要性をととても感じました。

心を動かされたこと

- ・日本で暮らすことで不安に感じるポイントがたくさんあるように感じました。普通級（学校）にもハーフ（ダブル）の子や海外がルーツの子どもたちがいるので、学びはもちろん、生活や文化で配慮できることがあれば相談に乗ったり、寄り添えるような人になりたいです。
- ・日本語学習を自国でしてきた人にも日本語を勉強する機会が必要だと思った。
- ・情報共有、手段に関して、手段として口コミが最も伝播しやすいということから、対話から信頼関係を構築する重要性を感じた。
- ・コミュニケーションの図り方について、言語が先行するのではなく大切なのは「何を伝えたいか」が分かること、話そうと思うマインドを持つことだということ。

## 2. 外国人すまいサポートセンター 柳さんのお話（9月21日）

印象に残ったことなど

- ・高齢化に伴う問題について 外国人の高齢化が進むことで、失業等や保険問題等多様な問題に対応せねばならないこと。
- ・多文化共生社会をめざして、の「平等」と「公正さ」の絵が分かりやすく、なるほどと思った。（その人にあわせて、その人に必要なものを用意しなければならない、ということ）
- ・すまセンの成り立ちについて 行政が関わったことで不動産業界の参入が実現し、企業もまちの生活課題に対して意識を向けられる兆しをつくったこと。
- ・すまい探しのパンフレットが12か国言語もあったこと。

心を動かされたこと

- ・育った環境によっては自分のルーツの文化や言語習得のために支援や学習が必要なこと
- ・すまセンの活動がコロナで停滞するどころか必要性が増していること
- ・自身が海外に行って生活することになったら、と自分に置き換えて考えるのがよいと感じた。いくら翻訳するとしても、行政等については日本人でも分かりづらく母国語での記載だけでも安心感が持てる。相手に寄り添うことの大切さを学んだので、今後海外の方と対話する機会があれば実践したい。
- ・リュさんのお父さま（アボジ）のお話。自身が言葉は話せるのに読み書きができなかったことの悔しさを、自身の子どもたちが同じように後悔しないように文化や言葉を学ばせたいとの想いから実現させているのが素敵でした。また私自身もその話を伺って、朝鮮学校に対する見方、考え方が変わりました。

## 3. 寿地区センター 炊き出しの会 汀さん、近藤さんのお話

印象に残ったことなど

- ・建物の様子からも、もっと支援が求められていると感じた。
- ・炊き出しなど必要ない社会を望んでいること。
- ・日本では、男性は5人に1人、女性は3人に1人が相対的貧困であること
- ・生活保護、不正受給者が全体の0.4%しかいないこと
- ・生活保護を受給するハードルが高いこと（家族に知られる）

心を動かされたこと

- ・ どうにかしたい、おかしいと思ったことに対して行動にうつしていること
- ・ 路上生活者を襲う事件があったこと
- ・ 日々の活動中でのご苦労や直面したトラブル
- ・ 法務省が「思いやりをもつこと」と掲げていることへの警鐘。特別視する時点でちがう。他者の理解の仕方の根本を追求すべき。

#### 4. 研修を通して印象に残ったこと、感想など

- ・ 多文化共生については外国人が日本で困っていることなどを知ることができた。また、路上生活者について知識が全くなかったため、大きな刺激を受けた。
- ・ 一年生とお話することができ、学生スタッフ同士の交流もできた。
- ・ 寿町や在日外国人への課題など、自分が横浜で過ごしていて見過ごしていた問題や、知っておくべき課題を学ぶ機会になった。
- ・ 事前研修会を含め、自身の知見を広められたことで、また一歩他者に寄り添えるきっかけが増えたと感じた。様々な方にお話を伺えたので、現在の日本の社会的弱者にかかる問題について意識し、より偏りのない自身の考えをまとめられたようにも感じる。



## 大学祭

2023 年 11 月 3 日から 4 日まで、大学祭が開催されました。SDGs よこはま CITY、特定非営利活動法人 四季の会とコラボし、各団体の紹介展示、フェアトレード商品やクッキーの販売、トークカフェを行いました。

### ■ 展示

- ・ ボランティアセンターの活動紹介（パネル）  
ボラセン 20 年の歴史、アンネのバラ、演奏ボランティア、アジア学院スタディツアー
- ・ リーフレット
- ・ アンネのバラ 20 周年リーフレット
- ・ ボランティアセンター2022 年度活動報告書
- ・ SDGs よこはま CITY 各団体、四季の会の活動紹介（パネル）

### ■ 販売

- ・ フェアトレード商品
- ・ クッキー販売 4 日のみ

### ■ トークカフェ

- ・ SDGs よこはま CITY 団体紹介（3 日）
- ・ 特定非営利活動法人 四季の会 団体紹介（4 日）



### < 参加団体 > 順不同

- ・ 特定非営利活動法人 日本・バングラデシュ文化交流会
- ・ 特定非営利活動法人 イランの障害者を支援するミントの会
- ・ 特定非営利活動法人 LOOB JAPAN
- ・ NPO 法人 リンクトゥミャンマー
- ・ 特定非営利活動法人 光の子どもたちの会
- ・ ワンワールド・ワンピープル協会
- ・ 特定非営利活動法人 WE21 ジャパン
- ・ 外国人住民基本法の制定を求める神奈川キリスト者連絡会
- ・ 特定非営利活動法人 Global Bridge Network
- ・ 認定 NPO 法人 パレスチナ子どものキャンペーン
- ・ (旧)草の根援助運動
- ・ アジアの女性と子どもネットワーク
- ・ 地球の木
- ・ 特定非営利活動法人 四季の会



## 2. 演奏ボランティアチームの活動

### Thank you concert

日時：7月26日 10時40分～10時50分

場所：緑園チャペル

参加者：音楽芸術学科4年1名（トランペット）、2年1名（サックス） 計2名

日頃お世話になっている清掃スタッフの方、シルバー人材の方々へ感謝の気持ちを込めて演奏をプレゼントしたい、と演奏ボランティアチームの学生スタッフが発案・企画し開催しました。曲目はトランペットとサックス二重奏による「花は咲く」です。17名の方にご来場いただき、ポプリをお配りしました。



### ボランティアセンター演奏会（於コミュニティだんだん）

日時：8月31日（木）13時～14時

場所：コミュニティだんだん

参加者：音楽芸術学科4年2名、2年1名、1年2名 （計5名）

今年度もNPO法人だんだんの樹と共催で演奏会を開催しました。開催日である8月31日は英語圏で“I love youの日”。それにちなんで『愛』をテーマにし、心あたたまる演奏会となりました。会場にはコミュニティだんだんのプログラムに参加している高齢者の方々やだんだんのスタッフ約20名が集いました。

#### <プログラム>

1. 「365日の紙飛行機」(ギター弾き語り)
2. 「愛を感じて」(クラリネット、ピアノ)
3. 「アイノカタチ」(フルート、ピアノ)
4. 「花は咲く」(サックス、ピアノ)
5. 「バラが咲いた」(会場の方々と一緒に合唱)



## 高齢者サロン十日会

日時：9月22日（金）10時～10時30分

場所：泉ふれあいホーム

主催：和泉中央地区社会福祉協議会

参加者：音楽芸術学科1年2名

和泉中央地区社会福祉協議会よりご依頼があり、高齢者のサロン「十日会」での演奏ボランティアを実施しました。高齢者の方が楽しめるように選曲をし、最後は参加者全員が演奏に合わせて歌えるようにプログラムを組みました。

### <プログラム>

1. 「愛の讃歌」(ピアノ)
2. 「いのちの歌」(フルート、ピアノ)
3. 「アイノカタチ」(フルート)
4. 「涙そうそう」(フルート、ピアノ)
5. 「夏の思い出」(合唱)



## 第1回こころを彩るコンサート

日時：10月7日（土）13時～14時30分

場所：テアトルフォンテ ホール（いずみ中央駅）

共催：特定非営利活動法人 四季の会

参加者：音楽芸術学科4年7名、3年1名、2年1名（計9名）

昨年の大学祭に、四季の会の方がクッキー販売などで参加されていたことがきっかけで、今回の演奏会のお話をいただきました。初回ということもあり手探り状態でのスタートでしたが、四季の会の皆様と演奏チームのメンバーで打合せを重ねながら準備をし、成功させることができました。約150名の方がご来場くださいました。

### <プログラム>

1. 「赤いスイートピー」(ピアノ弾き語り、クラリネット)
  2. 「花は咲く」(トランペット、クラリネット、サクソ)
  3. 「きっかけ」(ギター、歌唱)
- == イントロクイズ ==
4. 「カイト」(ピアノ、フルート)
  5. 「夏色」(ギター弾き語り)
  6. 「栄光の架橋」(ピアノ、クラリネット)
  7. 「やさしさに包まれたなら」(ギター、全員合唱)



～こころを彩るコンサート ご来場者の声～（アンケートより一部抜粋）

・学生の方々がただ演奏するだけでなく、曲に対する思いなどを語ってくださったため、親しみをもってコンサートを楽しむことができました。これからもコンサートを楽しみにしております。

・普段、通院や闘病で何の楽しみもない生活を送っています。季節も行事も記念日も何もないいわばモノクロの毎日に、今日のコンサートは彩りを与えてくれた。

・一曲一曲、丁寧に演奏、歌っていたのが伝わってきて、感動した。

・素晴らしいコンサートだったので、是非第二回、第三回と続けて行ってほしい。開催に尽力された方々に感謝します。ありがとうございました。

・皆さん上手で見ていて楽しかったです！これからも頑張ってください！！

・楽しく参加できあっという間に時間が過ぎってしまったかんじでもっと演奏を聴きたいと思いました。準備等大変だったと思いますが楽しい時間でした。ありがとうございました。

・学生の方々が楽しんでもらうよう頑張っていた姿が心に届きました。

・演奏がとても素晴らしかったです。司会の進行や曲の聴きどころなどのおしゃべりも楽しく進めてらしてこちらも楽しめました。イントロクイズも楽しく参加できました。

・素晴らしい音楽を聞いて自分もがんばって前に進もうという気持ちになりました。

## めぐみ幼稚園クリスマス祝会

日時：12月9日（土）9時30分～11時

主催：日本基督教団横須賀上町教会附属めぐみ幼稚園

参加者：音楽芸術学科4年1名・2年1名、1年2名（計4名）

めぐみ幼稚園から毎年クリスマス祝会の演奏ボランティアの依頼を受け、学生が参加しています。プログラムは、第一部ページェント、第二部フェリス生による演奏、サンタさんからのプレゼントという構成。

演奏の曲目は次の通りです。

1. 「赤鼻のトナカイ」
  2. 「we wish you a merry christmas」
  3. 「ウィンターワンダーランド」
  4. 「きよしこの夜」
  5. 「ハッピークリスマスメドレー」
  6. 「勇気 100%」
- ～アンコール曲～
7. 「ジングルベル」



### 3. アンネのバラチームの活動

#### アンネのバラの由来

アンネのバラは、本間慎元学長を通して黒川万千代氏（当時、ホロコースト教育資料センター副理事長・故）のご協力を頂き、バラ育苗家の山室建治氏より寄贈を受けて、2003 年 11 月 17 日、植樹されました。この年、廣石望初代ボランティアセンター長を中心に「アンネのバラ育成プロジェクト」が発足し、以来、学生たちの精力的なボランティア活動に支えられ、平和への願いの象徴であるバラが育成されています。

アンネのバラチームによる日ごろのお世話の甲斐もあり、2022 年にアンネのバラの教会よりご寄贈いただいた 2 株を含め、春にはたくさんの綺麗な花を咲かせました。

「アンネのバラ」は、蕾の時は赤、開花すると黄金色になり、時間の経過とともにサーモンピンクに変色し、やがて更に濃いピンクに変色するという具合に、色が変わっていきます。さまざまに色を変えるバラを「アンネのバラ」として選んだことには意味があります。

アンネは豊かな才能を秘めたまま戦争と民族差別のために、若くして命を奪われました。そんな彼女が生きていたなら、その才能を活かし、人生において幾つもの美しい花を咲かせたに違いありません。多彩に変容する「アンネのバラ」には、多くの可能性を秘めたアンネを表現し、平和を祈るという、このバラを作出したベルギー人園芸家ヒッポリテ・デルフォルヘ氏の願いが込められています。

1971 年、大槻道子という日本人がオットー・フランク氏と奇跡的に出会い、翌年のクリスマスにフランク氏からバラを分けて頂きました。その後、山室隆一氏にバラの増殖が託され、隆一氏が亡くなられた後はご子息建治氏がその栽培を受け継ぎ、アンネのバラは「戦争のない、平和な世界に」というアンネの願いとともに、日本全国に広まっています。



## 横浜ケーブルテレビジョンの取材

横浜ケーブルテレビジョンからアンネのバラについて取材があり、番組「地域情報便 じもっと！！」にて放映されました。国際交流学科 2 年 1 名、コミュニケーション学科 1 年 1 名、音楽芸術学科 1 年 1 名、計 3 名の学生が取材に応じました。

---

番組名：地域情報便 じもっと！！

放送チャンネル： YCV チャンネル （地デジ 11ch）

放送日時：2023 年 5 月 5 日（金）16 時～

再放送：5 月 5 日（金）20 時～、22 時 30 分～

5 月 6 日（土）7 日（日）8 日（月）9 時～、12 時半～、16 時～、20 時～、22 時 30 分～

5 月 9 日（火）9 時～、12 時 30 分～

YCV チャンネル公式 YouTube でも 5 月 8 日（月）から 1 週間限定配信。

---

## 東京新聞社の掲載記事（2023 年 5 月 3 日朝刊）



## 読売新聞社の取材

読売新聞社からも取材を受け、国際交流学科 2 年 1 名と音楽芸術学科 1 年 1 名が応じ、5 月 14 日の読売新聞朝刊に掲載されました。

## 【アンネのバラ記念礼拝】6月14日（水）緑園チャペル

### 「アンネのバラ記念礼拝と育成プロジェクト」

（大学 HP フェリスを綴るより引用掲載）

6月14日（水）、アンネ・フランクの誕生日（6月12日）を記念した礼拝が行われ、ボランティアセンターの学生が、礼拝の司会、奏楽、奨励、聖書朗読、アンネの日記朗読、フランチェスコの平和の祈りの先読を担当しました。

アンネのバラを記念した礼拝は、年に2回行われています。宗教センターとボランティアセンターが共同で20年にわたりこの記念礼拝を守り続けてきました。この礼拝の維持に関わってくださったすべての方たちに、感謝を申し上げます。奨励のテーマは「For Others」でした。高校時代に発達障がいをもつ子どもたち向けの紙芝居などのレクリエーションプログラムを行ったこと、地域で演奏ボランティアをしたことなど、学生が「For Others」を実感したときのエピソードを話してくれました。

今年の春、アンネのバラ再生プロジェクトで学生が大切に手入れをした結果、バラはたくさんの花を咲かせ、私たちの心を癒してくれました。ポプリに姿を変えた花びらの香りはさらに多くの人の心に届くでしょう。



## 【アンネのバラ植樹記念礼拝】11月15日（水）緑園チャペル

奨励 国際交流学科3年

20年という時間は長いでしょうか、短いでしょうか？

今から20年前、SMAPが「世界に一つだけの花」を発売し、お笑い番組「エンタの神様」が放送を開始、フェリスがある横浜では横浜アイランドタワーが竣工した年でもあります。今年はアンネのバラの植樹をしてから20年目という特別な年です。そのような特別な年の礼拝にアンネのバラと同年である私が奨励者の大役を仰せつかりました。この機会に改めて、アンネ・フランクとは何者なのか、アンネのバラに込められた思いというものを再確認することができたらと思います。

皆さんはアンネ・フランクといえば、どんなイメージを持たれるでしょうか？

歴史の授業で習った人はホロコーストによって殺されてしまった悲劇の少女というイメージを持たれている方も多いのではないのでしょうか。

アンネは1929年6月12日にドイツのフランクフルトで生まれ、4歳の時にヒトラー政権が誕生、一家はオランダに逃げ、アンネは6年間オランダの学校に通い、楽しい生活を送ります。アンネの周りにはいつも友だちがおり、10人以上の男子に思いを寄せられるほど可愛く賢い女性だったそうです。

しかし、アンネが11歳のとき、ナチスドイツがオランダに侵攻、この際父親のオットーは所有していた会社を隠れ家にすることにします。そして13歳のとき、姉のマルゴーに召喚状が届きます。皆さんご存じの通り、これは強制収容所に送られる片道切符であり、死の切符と言われていました。オットーはわが子を守るため、隠れ家に避難することにします。

アンネはこの年の誕生日に日記をプレゼントされ、アンネはこれにキティーと名付け大切にします。そして15歳のときにアウシュヴィッツに送られ、姉のマルゴーを看取った数日後に亡くなります。

アンネ・フランクの存在を世に知らしめるきっかけとなったキティーこと「アンネの日記」では、人生を嘆き、人生を受け入れ、人生を肯定していく1人の普通の少女であるアンネの思いや考えが表れています。

ここで一つ、ウクライナ侵攻、イスラエル・ガザ戦争のような暗いニュースに対してアンネはどのように向き合ってきたのか垣間見られる日記を抜粋して紹介させてください。

『1942年11月20日 親愛なるキティー

こういうニュースはどう受け止めたらいいのか、

実のところ判断に困っています。

これまではユダヤ人の悲惨な状況を耳にしてはいてもなるべく陽気なふりをしていました。

しかし時々途方もなく大きな絶望が襲ってきます。

ママはいつも泣いています。

パパも笑うことが少なくなっています。

でも学んだことが一つあるわ。

自分の小さな世界を癒せるのは

結局自分しかないということ。

パパやママも怖がるなら自分で何とかするしかないの。』

誰もが過酷な状況になったとき、最後に頼れるのは自分だけなのだ、これは子どもでも大人でも変わらない、アンネは自分にそう言い聞かせていたのではと私は思っています。

13～15歳という短い期間に綴られたものですが、どの世代にも共感出来るポイントがあるのではないのでしょうか。アンネの日記を読んだことがない人にはさっぱり分からないと感じるかもしれませんが、ぜひ、心の片隅に記憶しておいて欲しいです。時を経て読み返してみるとずっと理解出来たり、より深い意味を感じとることができたりします。また、読む年齢やその人が経た経験によって、その本が全く異なった相貌を現すこともあります。優れた書籍は時を経て磨れることなくずっと読まれるのを待っていてくれます。気が向いたらぜひ、アンネの日記を読んでみて下さい。

そんなアンネの日記と共に渡されたプレゼントがあります。それがバラです。

オットーが「アンネの好きな花を」とバラも一緒に贈ったのです。

隠れ家のお庭で大切に育てていたであろう野ばらを基にして、交配を重ねて作出されたのが、アンネのバラ、学名は *Souvenir d'Anne Frank* (アンネ・フランクの形見)、別名アンネ・フランクの思い出ともいわれています。

作出したベルギーの園芸家であるヒッポリテ・デルフォルヘ氏はアンネと同じく、強制収容所に入れられ、オットー同様、かろうじて生還した一人です。同じ境遇にいたからこそ、アンネの平和に対する気持ちに共感し、最も美しいバラをアンネに捧げました。アンネのバラは蕾の時は赤、開花後に黄金色、サーモンピンク、そして赤へ変色する特徴があり、デルフォルヘはもし生き延びる事ができたなら、多くの可能性を秘めていたアンネの姿をバラに投影しました。オットーの手に渡ったバラはお庭で大事に育てられ、世界に広められました。日本には1971年にイスラエルを訪問していた聖イエス会のしのめ合唱団がレストランでオットーご夫妻と出会ったところから交流が始まります。オットーから分けていただいた10株のバラを園芸家に分けて育ててもらっても9本が枯れ死。生き残った一株のみ開花しました。このことを記念して兵庫県にアンネのバラの教会が設立されました。昨年、新しく植樹を行った2株はアンネのバラの教会から無償で譲り受けたものになります。改めてアンネのバラの教会に感謝を申し上げます。

先ほど、無償で譲り受けたと言いましたが、無償とわざわざ言い含めたのには理由があります。デルフォルヘが有償での譲渡を禁止していたからです。明確な理由は分かりませんが、有償での譲渡を禁止していたことにより、ヨーロッパでは、特にアンネが生まれたフランクフルトでは一度アンネのバラが絶え、存在が忘れられる事態にまで陥りました。2001年に日本人学校の教師からドイツでアンネのバラを育てられないかアンネのバラの教会に問い合わせがあったことから初めてヨーロッパでの現状を知ることとなりました。

日本からドイツへ株を持っていくのは至難の業です。

オットーから分けてもらった10株のうち9株が枯れ死した背景には、長時間の飛行機移動がありました。航空会社から航空貨物として送るのではなく、手荷物として送ることで防げるのではないかと提案があり、枯れ死することなく、日本からアンネが生まれたフランクフルトへアンネのバラは里帰りしました。

バラは人が作り出した植物です。自然環境の中で野放しの状態では至って不安定な個体だと言うことです。いわば人の手がないと育たない。人の美に対する飽くなき「エゴ」の成せ

る技がバラを作り出しました。世間には人間の欲望の結晶が沢山見受けられます。宗教もその一つと言えるでしょう。救いを求め、よりどころが欲しいといった社会システムでは補いきれない、こぼれ落ちていくものを宗教は支えています。しかしながら、現在起きているイスラエルとガザの衝突のように人々の「エゴ」は時として暴走し、宗教が暴走の拡声器になっています。自分の支えになるものがあるのは素晴らしいことですが、アンネが言った通り、「最後に頼れるのは自分だけ」なのだと思います。それでも誰かの支えとなりたい、これは私の単なる「エゴ」です。中庭に咲いているアンネのバラが皆様のひと時の癒しになれば幸いです。



## ポプリづくり体験@ミニオープンキャンパス

日時：11月23日（木）

場所：ボランティアセンター

参加者：コミュニケーション学科2年1名、音楽芸術学科1年1名  
高校生5名（計7名）

ボランティアセンターにて、ミニオープンキャンパスで来校した高校生を対象にポプリづくり体験を行いました。学生スタッフ2名が、アンネのバラについてやポプリの作り方の話をしながら一緒に作業しました。



## アンネのバラ育成のための研修会

日時：11月11日（土）14時～15時

場所：横浜イングリッシュガーデン

講師：川崎 菜由氏（横浜イングリッシュガーデン職員）

参加者：音楽芸術学科3年1名、国際交流学科3年1名、音楽芸術学科1年1名、日本語日本文学科1年1名

上條コーディネーター（計5名）

2022年度に引き続き、横浜イングリッシュガーデンのご協力を得て研修会を実施しました。イングリッシュガーデンの2200種にも及ぶバラの育成のお話や、秋のバラの様子を実際に見学し、アンネのバラの冬剪定などについてのアドバイスをいただきました。

### <参加者の感想>

・ガーデナーの方のお話を聞くのは初めてだったので、専門の意見を聞けて勉強になりました。バラの症状を言うと、すぐ改善策を提示されて、すごいなと思いました。栄養を補給するためにも葉は残しておかなければいけないのだなと思いました。枝切りにも細心の注意を払いたいです。

・今回が初めての参加でしたが、バラについての興味・関心が向上した貴重な時間だったと感じられました。私自身がアンネのバラ以外の品種をあまり知らなかったもので、まさか青までも存在したのは衝撃でした。多くの品種で異なるのは色合いだけでなく、形、匂いの強さ、葉の色もあり、バラの世界は想像より深くとても勉強になりました。栽培に関しても、思ったより葉は切らない方が良いなど、これからのアンネのバラの成長を+できる知識を教えていただきました。



## アンネのバラ 20 周年パンフレット

ボランティアセンター設立と、アンネのバラ植樹の 20 周年を記念して、アンネのバラ園芸チームの学生スタッフがパンフレットを作成しました。

### ♥ アンネのバラと ferris

2003 年 11 月 17 日にアンネのバラの蕾の植樹式が緑園キャンパスで行われました。当時の学長の本間信先生が、ホロコースト教育資料センター副理事長だった黒川万千代氏のご協力を頂き、バラ育葉家の山室隆治氏より苗をご寄贈いただきました。

以来、20 年以上にわたってボランティアセンターの職員と学生の温かい愛情と共に育てられています。

Q. アンネのバラとは？  
A. 「アンネの日記」を書いたユダヤ少女アンネ・フランクの、「戦争のない、平和な世界に」という願いが込められたバラです。  
「Souvenir'd Anne Frank」(アンネ・フランクの思い出)が正式名称です。  
時間の経過とともに、蕾の赤、開花して黄金色、そしてサーモンピンクから濃いピンクへと変わります。



### ♥ アンネのバラ活動

Look back in 2014~2023

2017 年 6 月  
「アンネの日記」70 周年企画



2019 年 5 月  
図書館との展示企画 ANNE FRANK

2019 年~2022 年は、コロナ感染症の拡大によって活動が減少する一方、長年バラのお世話をしていたボランティアの裾野さんがご退職なさいました。

～毎日の活動～

アンネのバラスタッフは週に 2 回、回次さすバラのお世話をしています！  
10 本あった株も 1 本減り、また 1 本減り、8 本になっていました。そこで、再び苗を寄贈していただき、2022 年 11 月 15 日のアンネのバラ植樹礼拝のあと、植樹式を行いました。



2022 年 11 月



2023 年 4 月

### ～ボランティアチーム再結成～

2023 年 6 月、ボランティアセンターに所属する学生たちの委任性式をウェルカムセンターで行いました。アンネのバラチームが結成され、定期的なバラ育成作業が再開されました。

ボランティアしてくださる方、ぜひ来てください！

～アンネのバラ礼拝～

年に 2 回、アンネの誕生日の 6 月 12 日と植樹記念の 11 月 17 日に近い日に、平和への願いを込めて宗教センターの協力で、記念礼拝と観望礼拝を行っています。

アンネのバラ礼拝の様子です。学生たちがアンネフランクの日記や聖書を朗読します。



学生作 フラワーアレンジメント



### ～バラの育て方講習会～

20 歳になるアンネのバラ再生プロジェクト

アンネのバラスタッフは、横浜イングリッシュガーデンのガーデナーから、バラの剪定や施肥、水やりなどの講習を受けてバラの育て方を学んでいます。



～ポプリづくり～



Instagram で発信



礼拝でプレゼント



アンネのバラチーム  
スタッフ募集中！！  
興味のある方はお気軽に  
ボラセンへお問い合わせください  
✉ volunt@ferris.ac.jp

### 2023年度メディア掲載

横浜ケーブルテレビジョン

東京新聞神奈川版

読売新聞

学内地図



編集・発行  
フェリス学院大学ボランティアセンター  
発行日 2023 年 11 月 3 日  
改訂日 2024 年 4 月 1 日  
担当：アンネのバラチーム



Peace from Anne  
アンネのバラとともに

フェリス学院大学ボランティアセンターは  
2003 年に設立され、  
2023 年に 20 周年を迎えました。

公式 Instagram



FERRISVOLUNTEERCENTER

## ．主なボランティア活動

### 1．NPO インターンシップ

NPO インターンシップは、NPO 法人アクションポート横浜（市民活動支援 NPO）の実施事業で、横浜近隣地域の NPO で大学生がインターンシップを行い、地域貢献を通して学生が成長する場を提供しているプログラムです。活動先は、「福祉」「国際協力」「子育て支援」「環境」「まちづくり」など多岐にわたります。

神奈川県下を中心に、明治学院大学、桜美林大学、横浜商科大学、横浜市立大学、神奈川大学、専修大学、関東学院大学、東海大学、フェリス学院大学が授業や課外活動の一環として参加している他、一般学生の受け入れも行っています。今年度は長期 20 名、短期 32 名、フェリスからは下記のように 6 名の学生を派遣しました。受け入れ団体は約 23 団体。

#### < 派遣団体 >

|                           |                 |
|---------------------------|-----------------|
| 短期：国際協力 NGO Act for Child | 英語英米文学科 3 年     |
| リロード                      | 国際交流学科 1 年      |
| NPO 法人横浜 NGO ネットワーク       | 国際交流学科 1 年      |
| ピピ親子サポートネット               | 音楽芸術学科 1 年      |
| 長期：NPO 法人アクションポート横浜       | コミュニケーション学科 1 年 |
| NPO 法人横浜 NGO ネットワーク       | 音楽芸術学科 1 年      |

短期体験コース 10 日間（80 時間程度）体験を目的。研修生として位置付け

長期実践コース 3～6 カ月程度（200～400 時間程度）週 1，2 回（長期休みは週 3 日程度）  
課題発見・解決、プロジェクトの実施等スタッフとして位置付け

| 活動             | 日程                          |
|----------------|-----------------------------|
| 募集説明会          | 5 月 11 日（木）オンラインにて実施        |
| 学生と NPO のお見合い会 | 6 月 3 日（土）@横浜市立大学金沢八景キャンパス  |
| 事前研修会          | 7 月 1 日（土）@明治学院大学横浜キャンパス    |
| （短期）成果報告会      | 10 月 21 日（土）@横浜商科大学つるみキャンパス |
| （長期）成果報告会      | 3 月 7 日（木）@横浜市役所 1 階アトリウム   |

## 2. 国際機関実務体験プログラム

公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）を通じて横浜国際協力センターに入居している国際機関・YOKE で実務体験を行います。横浜市内 6 大学（神奈川大学、國學院大學、明治学院大学、横浜市立大学、横浜国立大学、フェリス学院大学）が参加しています。

受入国際機関は、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）、国際熱帯木材機関（ITTO）、国連食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所、シティネット横浜プロジェクトオフィス、特定非営利活動法人 国連世界食糧計画 WFP 協会、独立行政法人国際協力推進機構横浜国際センター（JICA 横浜）、YOKE です。

今年度のフェリスからの派遣状況は以下の通りです。

夏期：IUC アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

2023 年 8 月 28 日～9 月 14 日

英語英米文学科 4 年 1 名

春期：公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）

2024 年 2 月 1 日～3 月末

国際交流学科 3 年 1 名

国際交流学科 1 年 1 名

Special Spring 2024  
in Yokohama

活動先  
★横浜市国際交流協会（YOKE）

活動期間  
2024 年 2～3 月の間の  
70 時間（春休み期間）

国際機関実務体験プログラム

★説明会が 3 回あります！（オンライン）

第 1 回 11 月 10 日（金）12:15-12:45  
第 2 回 11 月 14 日（火）12:40-13:10  
第 3 回 11 月 16 日（水）12:15-12:45

★いずれかにご参加下さい。  
★zoom URL はフェリスパスポートで確認か、ボランティアセンターに直接お問合せ下さい。  
volunt@ferris.ac.jp

ボランティアセンターで  
募集要項をお渡しし  
ています

対象：国際協力、国際協力、多文化共生に関心のある学部生・院生  
実際の国際機関活動体験が満載です！！

★連絡先：ボランティアセンター（CLA 棟 2 階）

### 3．学習支援ボランティア

子どもの教育に関するボランティアは、センターに初回来室するフェリス生に実施しているアンケートでも関心の高い活動分野である。毎年熱意を持った学生たちが、子どもたちとのコミュニケーションを大切にしながら、地域の学習支援ボランティアの現場で活動をしている。

#### 【横浜市立本宿小学校】

学習支援ボランティア

活動日時：応相談

活動内容：授業中に教室の中で学習支援、障がいのある児童に対する学習や学校生活の支援、  
校外学習の付き添い

対象：小学校1～6年生の一般学級または個別支援学級

ボランティア登録学生：音楽芸術学科4年1名・3年1名、  
英語英米文学科3年1名・2年1名、1年1名（計5名）

#### 【横浜市立岡津中学校】

学習支援サポーター

活動日時：毎週水曜日 15 時頃～（50 分程度）

活動内容：学習サポート

対象：中学校1～3年生

ボランティア登録学生：2023 年度はなし

#### 【特定非営利活動法人あすなろ / 瀬谷区学習支援教室このは塾】

瀬谷区生活支援課の寄り添い型学習支援事業

活動日時：月曜日・木曜日 18 時～20 時 45 分

活動場所：せやまるふれあい館

対象：中学生

ボランティア登録学生：国際交流学科3年1名

#### 【コミュニティだんだん 学習応援子ども食堂】

活動日時：毎週水曜日 15 時～19 時頃

活動内容：こどもたちの宿題や課題の手伝い、遊び

対象：小学生、中学生

ボランティア登録学生：日本語日本文学科2年1名、英語英米文学科1年1名、  
国際交流学科1年1名（計3名）

## 活動報告会

学習支援ボランティアに関心のある学生向けに、2023 年度に本宿小学校で活動中の学生 2 人による活動報告会を開催しました。また、本宿小学校以外の学習支援活動についても案内をしました。

日時：12 月 18 日（月）12 時 20 分～12 時 50 分

場所：ボランティアセンター

報告者：音楽芸術学科 4 年 1 名、英語英米文学科 3 年 1 名（計 2 名）

参加者：英語英米文学科 2 年 1 名・1 年 1 名、国際交流学科 1 年 1 名、  
音楽芸術学科 1 年 1 名（計 4 名）

### 内容

- 1) 自己紹介
- 2) 活動内容の紹介
- 3) 質疑応答
- 4) 参加者の感想

### < 報告内容 >

- ・クラスに入る曜日・時間帯について
- ・どのクラスに入るかは、その日になって、手の足りないところに入る。
- ・特別支援学級に入ることも多い。
- ・プールの監視に入ることもある。
- ・林間学校の付き添いや、運動会のイベントなどにも、参加したければ参加することができる。
- ・見学のときに校長先生が各クラスの様子を教えて下さり、そのおかげでスムーズにスタートすることができた。
- ・1 時限目は朝会も含めて 8 時 30 分スタートなので、そこから参加することもできる。4 限は 12 時 15 分までなので、大学の 3 限の授業にはぎりぎり間に合うが、昼食をとる時間はほとんどない。
- ・プールや図工でカッターを使うときなど、安全管理に気を遣うことが多い。
- ・各学年 4 クラスずつくらいある。

### < 質疑応答 >

Q：勉強はどんなことを教えるのか？事前に準備していくのか？

A：その場で生徒と一緒に先生の授業を聞いて、教科書などを見ながら教えるスタイルなので準備は不要。

### < 感想 >

- ・詳しいことを聞き、不安がなくなった。2 年になったらやりたい。
- ・こどもが好きなので、交流できる様子が魅力的だった。来年全休の日ができればやりたい。

・就活に有利になると思い(ガクチカとして)やりたいと思ってきたが、こどもたちもかわい  
くて、やりがいがある活動だということがわかり、人生で意味のある活動だと思った。

## 4. その他

### 泉区役所 家計改善啓発リーフレット作成

泉区生活支援課では、家計のやりくりがうまくできないことで困窮に陥っている区民へ「家計のやりくりワークブック～わたしのミライノート～」を配布しています。今回ワークブックの簡略版の作成にあたって学生の意見を取り入れたい、とのお申し出がありました。それを受け参加した学生が、泉区の職員の方と複数回打合せを重ね、リーフレット「知っておきたい一人暮らしのお金のハナシ」の作成に協力させていただきました。リーフレットは2000部発行され、区役所などの公共施設で配架されています。

参加者：コミュニケーション学科3年2名、日本語日本文学科1年2名（計4名）



### 第37回泉区社会福祉大会

日時：2月26日（月）13時30分～15時45分

場所：泉公会堂

参加者：音楽芸術学科3年1名・2年1名（計2名）

泉区社会福祉大会は、すべての人が安心して暮らせる地域社会の創造を目指し、区内での社会福祉活動に功績のあった区民及び団体等を顕彰するとともに、本会関係者の大会参加を通じて福祉の啓発及び区民の福祉理解の促進を図ることを目的として開催されています。

表彰式での受賞者名の読み上げなどを中心とした司会のボランティアに、2名の学生が参加しました。

## 泉区ファン交流会

日時：3月24日（日）13時～16時

場所：泉区役所

主催：泉区シティセールスプロモーション本部（事務局：泉区役所区政推進課）

運営：NPO 法人横浜コミュニティデザイン・ラボ

参加者：国際交流学科1年1名

上條コーディネーター（計2名）

泉区ファン交流会は、泉区が好きな方が集まり、交流しながら泉区の未来を考えるイベントです。国際交流学科1年生が「インターン（国際機関実務体験プログラム）」で取り組んでいる在住外国人の災害時支援の一環として、多言語表示の啓発活動を地域の人と考えたい」との想いを持って参加しました。当日は、3年後に区政40周年を迎える泉区について考えるワークショップや、40周年に向けての区長のピッチトーク、参加者同士が交流するネットワーキングがありました。

## ジョイントコンサート

開催日：11月19日（日）13時～15時

参加校：横浜市立岡津小学校、横浜市立岡津中学校、神奈川県立横浜緑園高等学校、フェリス女学院大学

会場：横浜緑園高等学校 体育館

ジョイントコンサートは、2003年に岡津中学校と緑園高等学校が中心となり、地域連携事業として企画され、地域の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学の5校種ジョイントコンサートという形でスタートしました。横浜市より青少年健全育成事業の助成を受けて実施されています。

フェリスでは、2021年度から主管が生涯学習課からボランティアセンターに移り、音楽学部の協力を得て担当しています。

### 【出演者】

音楽芸術学科4年（フルート）2名、音楽芸術学科3年（フルート）2名

### 【演奏曲目】

- |                             |          |                |    |
|-----------------------------|----------|----------------|----|
| 1. ビビディ・バビディ・ブー             | A . ホフマン | 作曲 / M . デヴィッド | 編曲 |
| 2. 魔女の宅急便メドレー               |          | 久石譲            | 作曲 |
| 3. 歌劇『トゥーランドット』より＜誰も寝てはならぬ＞ |          | ブッチーニ          | 作曲 |
| 4. フルート四重奏のための『カルメン』        |          | ビゼー            | 作曲 |
| 5. 彼方の光                     |          | 村松崇継           | 作曲 |

## 日本赤十字献血バス

日時：11月24日（金）10時30分～13時10分 / 14時40分～16時30分

場所：緑園キャンパス

参加者：音楽芸術学科4年1名・1年1名（計2名）

主催：日本赤十字社 神奈川県赤十字血液センター

緑園キャンパスに28年ぶりに献血バスが来校しました。その準備のボランティアに2名の学生が参加しました。全学生に効果的に呼びかける方法や、日程、時間帯、献血バスの場所などを日本赤十字社の担当の方と一緒に考え、準備しました。その結果たくさんの申込があり、学生・教職員合わせて約50名の方が献血にご協力くださいました。

### <参加学生の感想>

音楽芸術学科4年

今回大学に献血バスがやってくると聞き、学生の献血のきっかけづくりに携わりたいと考え、ボランティアに参加しました。

最初は参加者が集まるか心配でしたが、当日は予想以上に多くの学生に参加いただき、お昼休みは列ができるほどでした。そこには「人が直接呼びかけたこと」が大きく影響したと感じました。私は当日、バスの前で呼び込みや案内を行いました。少しでも興味を持って足を止めてくれる学生や、その場でやってみたいです！と参加くださった方もいて嬉しかったです。地道でも、人が直接声をかけることで情報だけでなく、しっかり相手の「心」に届くと感じました。

「献血」と聞くと私には関係がない、注射が怖いなどマイナスイメージを抱く人も多いと思います。しかし献血は、少しの気持ちと時間で誰かの役に立てるものです。いつも通う大学で献血ができるというのは献血ルームへ伺うよりもハードルが低く、学生の献血への最初の一歩になれた事と思います。

## あーすフェスタかながわ 2023

日時：12月3日（日）

場所：像の鼻パーク周辺

参加者：日本語日本文学科2年1名・1年2名、国際交流学科1年1名（計4名）

あーすフェスタかながわは、主に在日外国人の方々と多文化共生を目指すイベントです。このイベントは、一般の方々がボランティアで「企画委員」となり、イベント内容の企画から当日の運営まで協力し合って手作りで行われています。例年県内の大学生が参加しており、今年はフェリスの学生も「企画委員」として参加しました。（準備期間のみ）

## ・宗教センター・国際センター・ボランティアセンター合同企画

### アジア学院スタディツアー報告（2022年度より開始事業）

日時：6月10日（土）～11日（日）

場所：学校法人 アジア学院（栃木県西那須野）

参加者：国際交流学科3年1名、国際交流学科2年1名、英語英米文学科2年1名、音楽芸術学科1年1名、英語英米文学科1年1名、国際交流学科1年4名（計9名）

引率：相澤 一先生、上條 直美（ボランティアセンター）

ふりかえり会：6月20日（火）実施

宗教センター、国際センター、ボランティアセンターの合同プログラムとして実施。

アジア学院は、栃木県にあるアジア農村指導者養成専門学校で、アジア、アフリカ、ラテンアメリカを中心に研修生を受け入れ、世界中から集まるボランティアとともに、食べ物といのちの大切さを分かち合い、平和について考える機会を通して農村の指導者を養成することを目的としたキリスト教精神に基づく学校です。

1泊2日の短い期間ではありますが、アジア学院での自然とともに生きる生活を体験し、研修生やボランティアとの交流を通して学びを深めました。

#### 【プログラム】

##### 1日目

13:30 那須塩原駅集合

13:50 セミナーハウス着、オリエンテーション、キャンパスツアー

17:00 夕食（バーベキュー）

##### 2日目

8:00 朝食（コイノニア食堂にて、研修生・ボランティアと一緒に）

9:15 モーニングギャザリング

10:00 お話

11:30 昼食（エスニックカレー）

14:00 ふりかえり

15:00 解散

#### 【ふりかえり会での学生の感想】（一部抜粋）

ふりかえり会では、以下の点についてふりかえりを行いました。

参加の目的は達成できたか

学びや印象に残っていること

来年の参加者に向けたアピールポイント

達成できた。環境系の授業を通して、農業の実際の様子を「見たい」と思っていたので参加をした。「分解者」など、細かいことまで知り、体験することができた。

アジア学院は 90%以上が自給自足でできている循環型社会であるということが印象的だった。また、アジア学院は土を大切にしているところに驚きを感じた。土は汚いと思っていたが、大切なものであると自分で実感できた。

アジア学院は、ただ単純に家畜や農業、海外の人とのコミュニケーションのみでなく、非日常的空間に癒され、誰かを思いやる心や優しさを感じられることのできる素敵な場所だった。

達成できた部分とそうでない部分がある。福祉の仕事で国際協力をしたいので、アジア学院は最初の一步という目的で参加をした。アジア学院で様々な料理や文化を体験できたことで、目的を達成できた。英語のリスニングが難しく、十分にコミュニケーションをとれなかったことで、言語面の力不足は課題として残った。

手で食事をするのが難しかったことが印象に残っている。アジア学院の 100 人分の 1 か月の食費が 5 万円だということに驚いた。アジア学院やフェリスの参加者の良いところを発見できた。

「1 から食べ物を作る」とはどういうことなのかを体験することができた。また、様々な背景を持った人たちと共生することを体験できた。フェリス内部の新しい人との交流もできる。

#### 【アンケートより】

・私は豚が出荷されるまでに約半年くらいしかかからないというのを知り、すごく心に残りました。スーパーにはもう既に切られて売られてるし、元はどんな姿でどんな大きさであったのか想像もつきませんでした。山下さんの話を聞いて、すごくいのちを頂いていることを実感できたし、感謝を忘れないようにしなくてはならないなと思いました。

・アジア学院では 90%以上が自給自足でできているという循環型社会だということです。特に驚いたのが、アジア学院は「土」を大切にしているところです。土にいる分解者によって残飯や糞を分解しコンポストとして利用しています。誰もが土を毛嫌いしますが、アジア学院では土から得られる平和を理解しています。

・もう少し農業について学んでみたいと思いました。今回はほんとに少ししか回れず、家畜のことはあまり触れられなかったので、もう少し家畜などについて学びたいと思いました。



## アジア学院スタディツアーに込められた「For Others」の精神

宗教センター 相澤 一

話は 2010 年代にさかのぼります。旧 2 号館を CLA 棟として模様替えすることになりましたが、その際、今までチャペル横にあった宗教センターの場所に保健室が入ることになり、玉突きで宗教センターが移動することになりました。その結果、それまでキャンパスの各所に散らばっていた宗教センター、バリアフリー推進室、ボランティアセンターが、CLA 棟の 2 階に横並びで配置されることになりました。

当時、宗教センター長だった僕は、「せっかく For Others にかかわりがある 3 つのセンターの事務室が横並びになったんだから、共同して、For Others の精神を育てるようなプログラムを行えないか？」と考えました。それが、そもそもの始まりです。

ほかに、それまで行っていたプログラムが諸般の事情で閉じられてしまったということもありましたし、宗教センター単独のプログラムでは学生を集めることができなくなっているという事情もありました。とはいえ、それは宗教センターだけが例外なのではなく、ほかの部署も同じ事態に直面しているようでした。

そこで、各センターの責任者と職員さんに時間を取っていただき、お会いして趣旨を説明し、幸いにも賛同をいただくことができました。学長や事務長にもご了承いただき、行き先もアジア学院と決まりました。下見に行って、職員さんとプログラムについて打ち合わせをし、ようやく実現……と思ったら、新型感染症で、残念ながら、順延を余儀なくされました。

ようやく実現できたのは昨年度でしたが、まだコロナの余波が残る中ということもあり、本格的な実施は今年度になってしまいました。実現までけっこうな時間がかかってしまいましたが、第一回としては、十分な内容のものとなったのではないのでしょうか。

また、実施まで時間がかかってしまったぶん、国際センターなど、当初想定していなかった部署が協力の手を挙げてくださったりと、よい方向への想定外の展開もありました。また、ほかにも参加に関心を示している方もおり、来年度以後、さらなる想定外の展開をしていくかもしれません。

なお、これまでは言い出しっぺということもあり、今のところ当時の宗教センター長の僕が実施のために動き回ったり引率に同行したりしてきました。しかし、もしこの行事が本当に For Others の精神を育てることに役立つものであるなら、実際の主催者は「For Others の精神」そのものであり、その時々にはふさわしい人に宿り、実施へと駆り立てる、ということになるのではないかと思います。ですから、我々の目標は、まずはこの行事を継続して行っていくことであり、それによって For Others の精神育成の継承をしてく、ということになるのではないのでしょうか。さらに、それがほかの人たちを巻き込んで広がっていくなら、それはより望ましい形で、For Others の現実化となっていくだろう、というビジョンを思い描いてもいいです。どうぞ今後ともよろしくお願いします。

## 学生による活動報告

### 『第1回こころを彩るコンサート』の企画運営・演奏

音楽芸術学科 4 年

#### ボランティア活動の内容ときっかけ

本コンサートに携わる経緯として、特定非営利法人四季の会から、演奏会の依頼を受けたことが始まりだ。毎年、精神に障がいのある方々による、言葉にならない気持ちを詩や絵等、作品として表現する『心の色彩展』を開催しており、展示会と同時開催で、演奏会を開催できたらという内容だった。上條コーディネーターを通じ「演奏ボランティア」に所属する私と、演奏ボランティアチームのコーディネーターである音楽学部2年の学生がコアとなり、企画運営に携わるようになった。

#### 活動にあたり掲げた目標

私は、ボランティアセンターを通して、重度障害者施設とオンライン演奏会の開催、子ども食堂や幼稚園での演奏会企画・演奏等、子どもから高齢者、障がいのある方と「演奏」を介したコミュニケーションを図ってきた。この実践を活かし、以下のように目標を掲げた。

##### （目標）

- ・演奏ボランティアでの経験を活かし、通常の演奏会とは異なる「ボランティア」の演奏会を企画すること。
- ・四季の会で演奏会の開催が初めての試みであったため、演奏会の制作に関して、経験を活かしたサポートをすること。職員と積極的にコミュニケーションを図ること。
- ・演奏を届けるだけでなく、演奏を介し「地域の方々、利用者との繋がり」を意識すること。

#### 活動結果

私は、制作過程の中でも「プログラム考案」と「司会進行」に尽力した。

依頼内容には、地域の方々に気軽に足を運んでもらえるような親しみやすいコンサートであること、また、本学学生と利用者が共に歌唱をするなど「参加型」の演出が挙げられていた。さらに、企画ミーティングでは、職員から、コロナ禍によるレクリエーション減少も伴い、地域を巻き込んだ演奏会にしたいという想いも伺った。この内容に基づいて、世代を問わず楽しむことのできる楽曲構成や、手拍子や歌唱、各々の好きなように表現しながら鑑賞することのできる空間の実現を目指し、制作に取り掛かった。

まず、プログラム考案では、四季の会協力のもと、利用者にアンケートを実施し、曲選定の参考にした。結果、ポップスを中心に、昭和から平成と、世代を超えた楽曲が挙げられ、

バラードからリズムカルな曲と、テンポ感も充実した構成となった。次に、各演奏曲の音色を堪能して頂くため、楽器のレパートリーを豊富にすることを意識した。また、ただ演奏をするだけでなく、タンバリンやカスタネットを持った学生と一緒に壇上に上がり演奏を盛り上げる演出や、曲内で、1番はピアノの弾き語り、2番はクラリネット演奏に切り替わるなど、鑑賞の楽しみ方を多様化させる工夫を施した。そして、最後には利用者と学生が共に歌唱する「全体楽曲」を取り入れた。会場にお越し頂いた地域の方々にも一緒に歌っていただけるよう、歌詞カードを配布した。全体楽曲は、事前リハーサルを設けることで、利用者との交流は勿論、一緒に作り上げる喜び、自己表現の楽しさを感じていただけるよう、心がけた。

司会進行では、常に「対話」を意識した。出演者には「演奏に込めた思い」等をお話ししてもらい、鑑賞者に質問を投げかける場面も作ることで、双方向のコミュニケーションを体感できる演奏会を作り上げた。また、演奏曲ごとに「手拍子やお好きな方法と一緒に楽しみましょう!」と促すことを心がけ、通常の演奏会とは異なり、鑑賞者が気軽に、自身の好きな表現で鑑賞していただけるよう、「演奏会」という形式にこだわらないよう作り上げた。

#### 体験を通して感じたこと・今後の展望

私は今まで、施設内での演奏会が企画が中心であったため、外部の団体との共催での企画が初めてだった。開催の5ヶ月前からミーティングを行い、0から演奏会を作り上げた経験は、大変貴重な機会であった。また、学生出演者や機材搬入等でサポートしてくれた学生からは、「音楽の良さを改めて実感することができた」や「音楽には、人と人との心を繋ぐ力があると再確認しました」という意見を頂いた。こうした声を受け取り、ボランティアという側面だからこそ見出される「音楽のちから」を、この活動を通して改めて感じられた。

第1回目の開催ながら、活動結果を踏まえて当初掲げた目標を達成できたのではないかと考えるが、開催までの計画の見直しや、企画に加わる学生の増員等、制作における課題も見受けられるため、本コンサートを継続できるよう、活動を通して感じた魅力や、ボランティアとしての演奏する意義を、多くの学生に伝播できるよう尽力したい。また、地域交流という面から、今回の演奏会では実現できなかった利用者と、本学学生以外の地域の方々との交流機会を増やせるような内容を考案できたら、より充実したプログラムになると考える。

今回の活動をきっかけに、さらに「誰もが表現をし、楽しく音を奏でられるような演奏」を届けたいと思うようになった。学生生活で経験した演奏活動を、卒業後も活かせるよう努める。



## 学習支援ボランティア活動報告 ～ 小学校での私の経験～

英語英米文学科 3 年

私がボランティア活動を始めたきっかけは教職を履修しているわけでも、将来教員志望でもない。元々誰かの役に立つことがしたいという想いがどんな時でも私の心の中にはあったからボランティア活動を始めたのだと思う。私が小学生の頃苦手な科目であった算数や理科の授業で、わからない部分があっても先生や人に「頼る」ということができなかったし、今振り返れば勉強が分からないという状況は学校生活を送る上で不安を持ち続けて過ごしていたのかもしれない。もし大学生くらいの学生ボランティアのような存在が学校生活の中にいてくれたなら、気軽に頼ることができて、勉強以外のことでももしかしたら相談できたかもしれないと考える。私は自分自身がそうだったからということもあり、子どもたちには不安を感じることなく学校生活を送ってほしいと強く願うからこそ、大学の掲示で募集をしていた学習支援ボランティアを本宿小学校で始めた。本宿小学校では様々な学年の授業に入り、学習支援を行っている。私はこの体験を通して様々な経験や感情を得ることができた。私は2023年の初めに活動を始め、生徒との関係性が構築できたころ教室に行く私のことを覚えていてくれる子どもたちがたくさんいた。その上、「教えてくれてありがとう」とお手紙や休み時間に作った折り紙、一生懸命色を塗った絵などを私にプレゼントしてくれる生徒が多くいた。私はその生徒たちに出会って子どもたちと関わることでこんなにも心が動かされることがあったこと、私がしている活動によって誰かの役に立っていることにうれしく感じた。もちろん教育の現場では様々な課題が多くあるというのは前提ではあり、教員志望ではなくとも学習支援という形で教育に少しでも関わっているということが私自身嬉しく感じ、自分の中でこんなにも心が動かされた出来事があったということは同時に今までの学生生活や大学での学びや知識などを生かした場所だったのではないかと感じた。ボランティア活動を行う上で本宿小学校の校長先生をはじめとする教職員や生徒並びに保護者の方々、大学のボランティアセンターの職員の方々の支えや協力があつたからこそ、私はこの活動を今も続けることができています。活動を行うにあたって、私自身も様々な不安もあつたが定期的に継続して続けられたのも周りの方々の支えがあつたからこそだと強く感じる。私のこの活動は今後の私が社会に出て働いたり様々な人とこれからも出会っていく中で、大切にしたい記憶と経験で、私の中での大切な学びである。



## NPO インターンシップ報告 (横浜 NGO ネットワーク)

国際交流学科 1 年

### ボランティア活動の内容ときっかけ

ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけは、学外で同年代の学生との交流が目的だった。当初はアルバイトなどの社会経験がなかったためボランティア先の団体選びに不安を感じていたが、SDGs や多文化共生に力を入れ、イベントを企画・開催していると知り横浜 NGO ネットワークに参加した。

活動内容としては、主に動画制作に取り組んだ。動画では SDGs の目標の一つである「海の豊かさを守ろう」をテーマに、海洋汚染をあまり知らない人や知っていてもどうしたらいいかわからない人に向けて制作している。その他にも、多文化共生や開発教育に関するイベントの参加や活動家の方々との交流を行った。

### 当初の自分の目的や目標を達成したか

活動当初の目標の一つ目は、実際に活動している人との交流によって、現地ならではの問題点や悩みや現状を知ること。二つ目は、環境問題と多文化共生といった関心のある分野の理解を深めることが当初の目的だった。実際に活動してみて、目的は十二分に達成することができた。目標の一つ目は、イベントの際に活動中の市民団体の方々がそれぞれ団体の抱えている悩みや問題点を参加者に伝え、それらを参加者全員で意見を出し合って考えていく場面があった。そうして、団体同士が議論を重ね、当初の目標よりも多くのことを知ることができ、目標の一つ目を達成することができた。二つ目は、私が動画制作をする上で団体のスタッフに話を聞いて回ったり、同じ団体で活動している学生とのディスカッションで多くの考え方や捉え方を知ること、関心のある分野の問題を多角的に捉えられるようになった。

### 活動において新たに感じたことや発見したことは何か

私たちが常識だと思っていたことが実は間違っているのではないかと感じた。例えば、一般的に日本で普及している商品とフェアトレード商品の価格の差はかなり大きい。物によっては倍以上違うものもある。それらの商品を比較した際に、私はまず初めにフェアトレード商品が高いと感じた。しかし、実際に考えてみるとフェアトレード商品は適正な価格で販売しており、フェアトレード商品が高いのではなく、一般的な商品が安すぎるのだと知った。原材料や生産者から安く買い、販売することによって価格を維持していると考え、今までの商品価格に対する常識は間違っているのではないかと。このように、実情を知らないことによって、私自身も知らず知らずのうちに貧困の子供たちや労働者を苦しめている側になっているのではないかと、今回の活動を通して新たに知ることができた。

### 自己についてどのような発見があったか

私は今まで、ニュースやネットで社会情勢や社会問題に関して積極的に知識を深めている

つもりだった。しかし、活動中に意見を求められた際に、適切な切り返しや返答ができず、自身の知識不足を痛感した。また、知識をインプットしていてもアウトプットする機会がなかったため、知識が定着していなかった。

いい発見としては、初対面の大人相手でも物おじせずに発言できるということだ。今までには社会経験がなく、同学年の学生としか意見交換をしてこなかったため、大人相手だと緊張して、うまく言葉が出てこないのではないかと思っていたが、今回の活動で誰に対してもしっかり意見を述べられると知れてとても良かった。

### **この体験をふまえて、今後何をしたいか**

今後は、NGO・NPO が開催しているイベントに積極的に参加したい。なぜなら、授業や本、インターネットから知る情報では限りがあり、そこからの発展が難しいと感じたからだ。実際に活動中に参加したイベントでは、活動家の方々に団体についてお話を聞いた際に、「興味があるなら、今度うちに来てみてよ」などのお誘いがあった。こうした人との繋がりと関心の発展は、現地に足を運び交流しないことには始まらないと感じた。だからこそ、活動を終えた後も積極的に人と関わりを持ち続けたいと思った。

### **感想**

ボランティア活動を通して行動することの大切さを知ることができた。現在は、端末一つで遠く離れた情報や知りたい情報を瞬時に知ることができるようになった。しかし、今回の活動で得られた繋がりや知識、意識の変化は、行動することでしか得られなかったことばかりだ。また、ボランティア活動に参加したことで、それ以外の場面でも積極的に現地に足を運んでみるようになり、以前と反対に活動的になった。

活動する前は、いろんな最悪の状況を想定して、一步踏み出せなかった私だが、今回の活動で「とにかくやってみる」ことが重要だと改めて気付くことができ、参加して本当に良かったと感じている。

## NPO インターンシップ報告 (ピッピ・親子サポートネット)

音楽芸術学科 1 年

### ボランティア活動の理由

元々子どもと関わる仕事に興味があり、それについて勉強したいと思ったためインターンやボランティアなどを探しておりました。

また、NPO について知りたいと思ったということも理由の一つです。説明会の中で、「NPO は、地域単位で社会の問題解決に取り組んでいる。」という説明を聞きました。その時、今までこのような方々に支えられて自分の日常を過ごすことが出来たのだなと改めて自覚し、地域のために第一線で活動されている方々を知りたいと思ったため、活動を決意しました。

### 目的の達成度

今回は、「保育・福祉事業に携わっている人と直接関わり、現状や事業所の意義などを知り、自分の意見を持つ」を大きな目標として設定しました。インターン先のピッピ・親子サポートネットさんは、保育事業を中心に、親子の集いの広場・一時預かり施設・障がい児施設・デイサービス・フードシェア活動・ヘルパーケア・移動型相談室...など多岐に渡り事業を展開されています。1、2 日で見学・活動する事業所が変わっていったので、様々な立場の人たちと関わり、様々な事業所の意義や目的を知ることが出来ました。活動を通して考えた自分の意見をこれからお伝えします。

### 活動において発見したこと

特に印象に残っている場所が「親子の集いの広場・はっぴい」という事業所です。はっぴいさんはその名前の通り、親子で施設内を自由に使用し、違った環境で子どもと関わる事ができる場所です。児童館に似ている施設ですが、不特定多数の方々が利用するのではなく、小規模且つ基本的に予約が必要になります。そのためより落ち着いて自由に利用することが出来ます。

そのようなはっぴいさんの体験を通して、保護者の方の拠り所は子育て、そして子ども達にとって非常に大切なものであると改めて気づきました。活動の中で、「子育てのなかで、自分を責めたり一人で抱え込むことが多かった。」とスタッフの方がご自身の経験を話してくださいました。そのように閉塞感や孤独感を感じてしまう保護者の方が、いつでもすぐに頼れる環境をはっぴいさんは作っています。

またそのスタッフさんは、「子育て中は子どもは大変で難しいイメージが強かったけれど、今考えてみると私は昔から子どもが大好きだった。」とも話されてました。そして体験を通して気づいたのですが、子どもの成長は本当に早いです。1 日 1 日できることが増えていき、関わる時間全てが貴重だと思います。

このような本来の自分の気持ちや子どもの輝きが「負担」にかき消されてしまい、難しさや辛さで終わってしまう子育てはとても悲しいなと感じました。しかしはっぴいさんのよう

な広場には、同年代の子どもたち、スタッフさん、同じ立場の保護者の方と様々な人が子どもを見守ってくれます。家の中では気づくことができなかった子どもの長所や成長がその環境下では見えてきたり、「○□ちゃんこれできるようになったね。」と他の保護者の方から教えてもらえることもあります。そして何より、子どもが最も安心するものはお母さんが落ち着いている姿、笑っている姿だと思います。親子共にリラックスができる場所。昔のように地域のつながりが希薄になり、人々の孤立化が進んでいる現代において、そのような場所は大切にされるべき「居場所」であると感じました。

### 活動を通して自己について発見したこと

今回のボランティア活動では、自分の新たな長所を見つけることができました。活動の中で、ある子どもに「お姉さんは子ども？大人？」と聞かれたことがあったのですが、それを見ていたスタッフさんが「どっちかわからないくらい、子どもたちは戸田さんのことを身近で接しやすい人だと感じているんだね。」と言ってくれました。また活動後には「子どもたちもすぐに心を開いているようでした。誰にでもできるようなことじゃないと思います。そのような長所を大切にしてください。」という好評をいただきました。その時の嬉しさは忘れられません。今まで、私はどんな場面でも自信を持つことが出来ず、「過去の自分はこうだったからきっとできない。」と挑戦しないことが多い日々を過ごしていました。しかし今回、自分が興味を持っている保育・福祉業界のスタッフさんに少しでも認めていただき、自分の大切にしたいところを見つけることが出来たと思います。

### この体験を通して得たもの

短期間の活動をより充実したものにするために、「自分から周りをよく見て動くということ」の重要性を知りました。今まで「こうしたら迷惑だろうか。」など、余計な心配をしようように動けず終わってしまうことが非常に多くありました。それは「また次聞いてみればいいか。」と思えたからです。しかし短期間の活動では、次がないからそう考えられない。だからこそ、1秒1秒無駄にしないように、積極的に行動することができました。

しかし、同時に「周りをよく見る」ことにもより気をつけました。今回はインターン生として参加したため、社会人、またその事業所の流れに沿って活動することが必要でした。そのため、中高の部活動のように常に主体的に動きすぎるのではなく、「今なら私はこれができそうだな。」と周りの状況を受け入れながら活動していくという良い練習ができました。

また、今回の反省点として、事前に配布されたマニュアルの読み込みが甘かったことが挙げられます。全てに目を通し注意点や活動内容などを頭に入れましたが、表面的に過ぎず、「具体的にはどのようなことか・どのような状況か」とシミュレーションができていませんでした。実際に、大きい積み木の上で遊ぶ子どもから少し離れた瞬間に子どもが転んでしまったことがありました。幸い怪我はなかったのですが、マニュアルに書かれていた「子どもの行動は突飛であるから、常に注意を払わなくてははいけない。」というのはこういう時かと、やっとその時に実感しました。ただ読み理解した気になるのではなく、「例えばこれはこういう時だね。」と体験前に自分で考えてみるのが、経験が浅い場所ではより重要になることに気づきました。そして尚且つ今回は子どもという命に関わる活動であったため、

そのようなことは当たり前にならなかつたと反省しました。

### **この体験を踏まえ今後行いたいこと**

子ども・福祉に関わる他のインターンシップやボランティアに参加して、今回の学びを活かし、新しい課題・発見をしたいです。また今回の活動を通して、子どもに関することだけでなく、福祉全般のことにも関心が広がりました。今回は知識も経験もない上での体験でしたので、次回の体験では得た知識を活用しながら活動することを目標に準備していきたいです。

### **ピッピ・親子サポートネットへの提言**

1つ目として、「ボランティア活動として行われている『フードパントリー』をピッピを利用している子どもたちと一緒に活動する。」ということを提言いたします。テレビや教科書の中だけで見るフードロス問題について、実際に廃棄される食べ物の量を知ることが非常に重要だと思います。

私自身、日頃から廃棄を減らす取り組みをしているつもりなのですが、今回の活動を通してまだ気づけていないことが多くありました。例として、食べ物を残さないだけでなく、購入する時賞味期限を気にするなどの消費者態度を考えることにまで至っていませんでした。また企業や家庭からの食料を見た時、「私たちは普段店で、これらの価値を認めてお金を払っているのに、場所が変わっただけでこれらの食料はゴミになりかけてしまっていたんだ。」と思い、勿体なさに改めて気づきました。

このような理由から子どもたちが自ら、食品を運び、仕分け、分配する流れを体験し、廃棄されてしまう大量の食品に触れることは、生活を顧みれる大切な経験になると考えます。

### **自己評価**

活動を通して、新たな長所と課題を自認でき、活動後「自分は以前と比べて確かに変わった。」と自信を持って言えるようになったことが非常に嬉しく思います。また、上記に報告した内容以外にも気づきや感じたことがあるので、たくさんの経験ができたことを実感しました。15日間の中で子ども達と作ることが出来た思い出は本当に大切なものであり、得られた自信と経験はこの先の生活にとっても重要なものになるでしょう。充実した経験をサポートして下さった全ての方々に心から感謝します。ありがとうございました。

## NPO インターンシップ報告 (横浜 NGO ネットワーク)

音楽芸術学科 1 年

NPO インターンシップに参加しようと思った理由は 3 つある。1 つ目に大学生になり、ボランティアを通じて、社会問題に向き合い、同世代の方や、大人と解決策を考え、行動したいと考えたため。2 つ目に SDGs についてより深く知り、自分にできることを知りたかったため。最後に、地方から関東に住むようになり、関東にいる外国人の多さに驚き、多文化共生に興味を持ったため NPO インターンシップに参加した。

インターンシップを始めた当時、自分が取り組む課題に多くの人が興味を示してくれるよう、自分で勉強し、話し合っ、他者に伝える力を得たいと考えていた。インターンシップを終え、振り返ってみると、自分が企画するイベントを行う際、他者に伝えることを考え、イベントの準備、進行ができたと感じる。特に、自分の企画を行う際に、興味があった多文化共生についてのイベントに参加したことで日本に滞在する外国の方は、それぞれ理由があり、その人の特権を配慮することが大切だと感じた。また、企画を考えていく中で、年齢や、人種、宗教に違いがあっても音楽は世界共通だと思った。伝統文化や様々な音楽を誰もが楽しむことができる空間を作りたいと思い、「音楽×多文化共生」のイベントを企画した。自分が以前イベントに参加した際に得た情報を基に、人間の原点は一緒なのではと考え、イベントのプログラムやチラシを作成した。また、興味を持ってもらえるよう、私自身が演奏する曲はポピュラー音楽にした。音楽はその国の伝統や、譲れないものなどを表現することが可能だ。もちろん、自分を表現することもできる。このイベントを通して、伝統を受け継ぐ大切さや、民族関係、伝統楽器を知ることができ、表現の仕方が多様であり、受け取り方も多様にあると感じた。イベント当日は、感じ方は色々だが、否定せず、その音楽を皆が楽しみ、肯定しているように感じた。音楽でこのように感じるように、自分と異なる考えも受け入れる姿勢があれば、理解し合い、助け合うことができるのではないかと感じた。また、このようなイベントに参加して下さる方への感謝の気持ちがつなかりを広げてくれると感じた。イベントなどで興味関心を得ることで、社会問題を身近に感じるができると思った。

加えて、オンラインでディスカッション型の勉強会を企画する際は、事前調べをし、質問したいことや気になることを整理することで、進行もスムーズに行うことができ、目的がはっきりした勉強会になると感じた。この勉強会では、アメリカと日本から社会問題を見て、考え方の違いや若者が目指すべきことについてディスカッションを行った。市民の政治への参加熱意の違いや、若者の生き方、ボランティアのとらえ方について話し合った。この中でも特にボランティアのとらえ方が印象に残った。アメリカではボランティア活動を経ることで学校を卒業できたり、入学できたりする。日本は自分の意志でボランティア活動を行うことが多い。要するに、アメリカでは幼いころからボランティア活動に触れている人が圧倒的に多いと考えられる。そのため、社会問題を早いうちから認識することができ、国間で社会問題への知識に差が生まれると感じた。私自身、ボランティア活動をすることで、社会の状況を把握しやすくなり、行動もしやすくなった。また、新たなことに興味を持つことができた。そのため、多くの人が

ボランティア活動を行うことで、社会について考える機会が増え、当事者意識が高まり、少しずつ改善できるのではないかと考えた。

11 月に行った、大学祭では 12 団体さんのパネルを作成した。大人の方へのメールの仕方や、アンケート用紙の作りかたなども学ぶことができた。パネルの作成では、写真やロゴを入れて、来て下さる方の目に留まりやすいように工夫した。実際に作成して、大学祭で展示された時、一つのことを成功させるうれしさを実感することができた。また、ミニトークでは初めて進行を行った。イベントを時間通りに進める難しさを知った。

フェアトレードや開発教育、平和についてのイベントにも参加し、ワークショップや講義を聞き、身近に感じるほど興味がわき、解決に向けて行動がしやすくなったと感じた。特につながりは社会問題を改善していく中で大切にしなければならないと思う。

このインターンシップを通して、講義やワークショップを行う上で、これといった答えはなく、考えるほどいくつもあり、アプローチの仕方も多数存在すると感じた。決まった答えがないからこそ、一人でなく、仲間や他者とディスカッションすることで新たな視点から物事をみることができたと思う。このような考え方はあまり学校で行っていなかったため、大学の授業では答えを待つのでなく、考え、話し合い、いくつも答えを出していきたい。アプローチをしていく中で対立することも多々あると思う。自分には理解できないことだとしても相手の特権（家族構成や宗教、難民申請）を知ることができれば分かり合えるかもしれない。しかし、コミュニケーションがなければ、相手について知ることができない。つながりを大切にすることで、当事者意識が高まり、支援の幅も広がると思った。

大学一年生で、このインターンシップに参加できたため、残り 3 年も大学生として参加できるイベントに出会える。このインターンシップを通して興味を持った多文化共生だけでなく、難民や平和などについても現地に行って感じたり、ボランティア活動を通して、学んでいきたい。自分が学んだあと、他者に伝えたり、自分が学ぶ側でなく、伝える側になりたい。

長期インターン生として私を受け入れてくださった横浜 NGO ネットワークさんには活動をしていく中でとても支えてもらった。理事長の小俣さんと会話を交わすことで発見できることが多くあり、新しいことに挑戦することができ、また、達成感を味わうことができた半年だったと感じる。

この半年間、イベントなどを通して、今までは考えることがなかった社会問題について議論したり、勉強したりできた。インターンシップを始める前と比べて、知識が増えたため、問題解決に向けて、考え方が変わり、具体的な解決策を思いつくようになった。また、人や団体同士のつながりが興味、共感を呼び、問題解決に必要なだと感じた。

## NPO インターンシップ活動報告 (アクションポート横浜)

コミュニケーション学科 2 年

初めにインターンシップへの参加理由は、自分と同じ目的意識のある人や熱量が同じ人と出会いたいと思ったことです。大学の掲示を見て、この活動なら良い刺激をもらえるかもしれないと思い、NPO の知識や明確にやりたい分野の活動があったわけではありませんでしたが飛び込んでみました。また、一年生のうちに何か長期的にチャレンジしておきたかったので半年のインターンを選びました。

私のインターン先の「アクションポート横浜 (APY)」は若者と地域を繋ぐ活動を行っている、中間支援組織です。地域活性化のために活動する人の不足や高齢化の話が課題とされる一方で、若者たちも活動したいが上手くつながることができないという現状があります。APY はそういった双方の思いを汲んで、両者をつなぐコーディネーターの役割を行います。若者が積極的に地域に関わることで、地域の活性化につながります。言葉で言うのは簡単ですが、私は活動を行う中でその事例を何度も目の当たりにしてきました。APY は中間支援組織のため、分野の枠にとらわれずに様々な形で地域に働きかけている学生や若者と関わることができました。そのため、NPO について明確なイメージのないままで活動していましたが、学生が地域で活動することの実態や目的を掴むことができたと思います。初めはその活動の規模や積極性に驚いたりしましたが、同世代の活動に刺激を受けて、自分にも何かできるかもしれないという前向きな気持ちが生まれました。

APY での活動から、若者と地域が関わっていく上での課題も見えてきました。若者が地域で関わっていく上で、「活動が知られていない」、「引継ぎが上手くいかない」、「経済的負担がある」などの課題により満足に活動できていない例もあります。そういった団体の課題や活動を知ってもらい、課題解決のサポートを行うのが、私が運営に参加した「横浜アクションアワード」です。

「横浜アクションアワード」とは、横浜市内の若者団体と地域がパートナーシップを組んで活動している企画を、表彰するイベントです。これは、ただ表彰するだけのイベントではなく、出場団体同士が出会う場になったり、審査員の企業や行政の方に様々な角度から課題解決のヒントをもらったりと、団体の新たな可能性を見出すことのできるイベントです。私は APY の学生スタッフさんにたくさんサポートしていただきながら、出場団体探しや団体へのヒアリング、審査会のための準備をしました。イベントの準備としてスライド作成や資料作成なども行いました。

特に、アワードの出場団体が出揃い始めてきた時や、一次審査の開催後にやりがいを感じました。エントリー期間中は細々と出場団体への声掛け、アワード開催の宣伝を行いました。しかし、出場団体が揃わないと開催には繋がらないので、先が見えない中で次の準備に向けて動いたりすることに不安がありました。無事に開催ができると確信できた時は嬉しかったです。ただ、一次審査までアワード開催が運営側だけのものになってしまっていないかと感じることも多く、アワードが本当に団体にとって意味のあるものになっているのかと考

えることもありました。そのため、一次審査の際に出場団体の方から「アワードに参加できてよかった」と言っていただけでとても救われました。

私も一次審査を通して、それまでのヒアリングや関わりからは見えなかった団体の熱意を知ることができて良かったです。どの団体も地域貢献に向けて素晴らしい活動を行っており、その長所を上手く伸ばすために審査員やファシリテーターの方の意見を参考にしていました。団体の方は大きな魅力だと思っていたいなかった部分が、私たちから見ると魅力になる部分もあり、二次審査ではそこを前面に出した方が良いというアドバイスも出ました。団体だけで活動するのも良いのですが、第三者の視点を求めることも活動の発展に繋がるのだと強く思い、アワード開催の意義を実感しました。

このインターンを通して、私は自分のやりたいことが明確になりました。上記に述べた通り、「何かやってみたい」という気持ちだけで飛び込みましたが、将来につながるたくさんの収穫がありました。インターンでの活動と実際にやりたいことは、方向性が微妙に違ったということに一年生の段階で気づけたのも成果です。APYで様々な分野の方と関わったからこそ、幅広く吸収することができたと思います。また、地域貢献活動を行うたくさんの同世代の方々と出会って、その行動力の高さに刺激を受けました。行っている活動に一貫性がある方や、将来性のあるビジョンを持ちながら活動している方を見て、自分の計画性のなさや詰め甘さに気づきましたし、どうやって企画を立てていくのか、やりたいことを突き詰められるのかを深く考えるきっかけにもなりました。

そして、とても個人的な課題になりますが、元々コミュニケーションをとるのが苦手だったり、他学年の学生が多かったことから、コミュニケーションをとる面で遠慮してしまい苦労しました。話し合いの時の意見だけではなく、自分の気持ちを素直に表現することも意識するようになりました。私は、自分の気持ちを言葉にするのが苦手なタイプだと分かったのもひとつ成長だと思います。

NPOに対する知識を深めること、意識が変わるのはもちろんですが、自分自身を深く知ることでもできたNPOインターンでした。インターン先のAPYの活動には今後も積極的に関わっていきたいとも考えています。NPOインターンシップはいつ始めても早くないですし、遅くないと思うのでチャレンジしたいと思った方はぜひ参加してほしいと思います。

## 国際機関実務体験プログラム（IUC）報告（夏期）

英語英米文学科 4 年

### IUC について

実習先である、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（Inter-University Center for Japanese Language Studies）は、中・上級日本語の集中教育を行う日本語教育・研究機関である。1961 年設立のスタンフォード・センターを前身として、アメリカおよびカナダの 10 大学によって 1963 年に設立された。1987 年、横浜市の誘致を受け東京から市内に移転し、1991 年以降、みなとみらい 21 地区のコンベンション施設「パシフィコ横浜」の 5 階に本拠を置いている。

主に北米の日本研究、日本専門家を目指す大学生・大学院生などを対象に、高度な日本語を習得させるための集中教育機関であり、学術、専門の分野においても対応できる日本語を習得できる機関となっている。

現在、加盟大学は 13 校。卒業生は 2,000 名を超えており、日本関係のあらゆる分野で研究者や政府関係者、あるいは実業家として世界中で活躍している。

（IUC 公式ホームページより）

### 国際機関実務体験プログラムを志望した動機

私は昔から英語やアメリカ文化に興味があり、将来は日本と海外をつなぐような仕事ができたらと漠然と考えていた。そして、高校生の時に日本語教師という職業に出会い、大学では日本語教員養成講座を受講することで日本語教育への知識と関心を深めていた。そんな私にとって、日本語教育に携わることができ、かつ英語を使って世界規模で働く体験ができるこのプログラムは憧れそのものであった。それに加え、実際の日本語教育の現場とそれを支える側の事務局のお仕事を見たいという思いが、応募の大きな動機となった。また、日英語を使ったオフィスワークを通じて自分の力を試し、PC のスキルやコミュニケーションの面でもさらに成長したいと考えていた。

現在、日本語教師になることがひとつの目標であるが、国際機関での勤務への適正も判断し、将来の可能性を広げることができればと思った。

### 注力したこと

私の興味や関心の中心は日本語教育にあるため、「上級日本語教育機関である IUC の教育システムへの理解を深めること」がこの期間中に重視したことのひとつであった。特に、上級クラスの雰囲気や授業の進め方が初級クラスとどう違うのか、民間の日本語教育機関との違いはどういったところにあるのかを知ろうと取り組んだ。そして、そういった教育システムを支えるための事務局の実務内容を知り、体験することが二つ目の目標であった。そして三つ目が「積極的に学生とコミュニケーションを取ること」である。学生の方と沢山会話をすることで、皆さんが IUC で感じていることや日本語学習への考えを聞くことができ、私自身が学生目線での追体験をすることができるのではないかと考えた。そして、日本語教育や IUC について多

方面から理解しようと試みた。

また、学生インターンとはいえ、組織の一員として働かせていただいているので、社会的なマナーを心がけて実務にあたった。挨拶や言葉遣いはもちろんのこと、IUC は日本語という「言語」を扱う機関であるため、教職員や、特に学生と話す際には、適切で美しい日本語を使用することを意識した。そのため、働く上で必要不可欠な社会的なマナーへの意識や、コミュニケーションをする能力が向上したと感じている。

## 学び・気づき

新たに学んだこととしては、事務局の仕事内容は PC を使った事務的な作業だけではないということである。学生の皆さんひとりひとりに寄り添った、生活面や精神面のサポートも重要な仕事のひとつであり、信頼関係の構築や環境整備が学習をより良いものにするのだということをも身をもって学ぶことができた。また、熱心な学生の姿やそれに答える最適な教育システムと教職員の方々、そしてそれらを支える地域の皆様など、様々な支えによって IUC が成り立っているのだということも学ぶことができた。

実習では何度か職員会議に出席させていただいたのだが、そこでは全員が参加して、ディベートのように意見を出し合っていた。些細なことも質問できる、意見を言い合える、全ての意見を肯定するような雰囲気があり、情報の共有が活発に行われていることがとても印象的だった。

授業見学では、先生によって異なる授業スタイルを見比べることができ、とても有意義な時間だった。どのクラスも扱っている内容は似ているが、学生のレベルなどによって授業スタイルを変えているところに面白みがあると感じたと同時に、とても勉強になった。

## 実習前と実習後の変化

実務体験プログラム参加前に比べて、国際機関との心理的な距離が近づいたと考える。今まではどこか遠い存在に感じていたが、グローバルキャリアガイダンスや各国際機関への訪問によって仕事内容についての理解が深まり、行われている事業は思ったよりも身近で、地域に根差したものなのだと知ることができた。

また実習期間には、実際に日本語教育機関で働いている教職員の皆様から、日本語教師のキャリアについてや、具体的な自身の体験談をお話いただいた。それにより、これまで私が抱いていたキャリア形成についての不安や不透明な部分を取り除いていただけたように感じている。そして、実際の教育現場を見学し参加したことで、以前よりも日本語教育への関心が高まり、将来のビジョンがより明確に見えてきたように思う。加えて、共にこのプログラムに参加した他大学の仲間たちとの出会いは、今まで以上にグローバルな視点を持つきっかけとなった。彼らは私にとって新たな価値観を広げてくれた存在であるとともに、似た志を持つ仲間である。そんな仲間と出会うことができ、これからも高め合えることは私にとって大きな財産となるだろう。

## 今後の展望

私は現在日本語教師を目指して学習をしているが、この実習を経て、日本語の面白さや教育

の奥深さを改めて感じた。そして、やはりこの先も日本語教育に携わり、この経験を生かしていきたいと強く思った。今回事務局の実務を体験させていただいたことで、学生や組織全体を支える立場の大切さを改めて感じ、教師という立場以外での日本語教育への関わり方にも興味が湧いた。また、独自のテキストを見せていただいたことで、教材が学習に与える影響の大きさを感ずることができた。そのため、今後は日本語教授についてだけではなく、さらに視野を広げた学習をしていけたらと考えている。また、IUC の学生の皆さんが高い目標を持って日本語を学習している姿を見て、私もさらに語学学習に力を入れようと意欲が湧いた。

今回の実務体験では、データベースの入力など、PC を使った作業を多く行った。最初の方は作業に慣れるまでに時間がかかってしまったり、ミスをしないようにと慎重になるあまり時間がかかってしまったりして、自身のコンピューターに関する実力不足を痛感した。この先、PC を使う機会はさらに増えると考えられるため、今後は基本的な操作に加え、仕事を効率的に行うために PC スキルの向上を図りたい。

## おわりに

国際機関実務体験プログラムでは、実習先である IUC のみならず、様々な国際機関について理解を深めることができた。それぞれの機関が行っている国際的な活動や、地域レベルでの在日外国人への支援などを知ったことで、遠い存在であった「国際機関」を少し身近に感じ、さらに知識と関心を深めることができた。

約 2 か月間の実習の中で様々な経験をさせていただき、特に IUC の日本語教育システムや実際の授業風景を見学させていただけたことは、日本語教師を目指す私にとって大変貴重な経験であった。今後の私のキャリアや価値観に大きく影響を与えてくれるような経験ができたことを大変嬉しく思う。

受け入れてくださった IUC の教職員の方々や、サポートしていただいた多くの皆様に感謝いたします。

## 国際機関実務体験プログラム（YOKE）報告（春期） ～ 横浜市の多文化共生に触れて～

国際交流学科 1 年

横浜市国際交流協会（YOKE）は横浜市に住む外国人の支援と多文化共生のために活動する団体である。主に、日本語がわからない外国の方々のための通訳ボランティア派遣事業や南区、中区、鶴見区における国際交流ラウンジでの日本語教室・学習支援の運営、多文化共生や SDGs に関するイベント・講座の運営などその活動は多岐にわたっている。

今回、私が YOKE の国際機関実務体験プログラムに参加しようと思ったきっかけは大学で日本語教員養成講座の授業を受けたことだった。その授業では在日外国人が増えたことによって日本ではどんなことが問題になっているのか、その問題を解決するためにどんなことが行われたのかを事例とともに学んだ。そして、日本で暮らす外国の方と話してみたい、横浜では在日外国人に対してどのようなサポートが行われているのか学んでみたいと思った。特に地域日本語教室ではどのような支援が行われているか実際に見てみたかった。また、私は高校生までボランティアやインターンシップなどの学外活動に参加したことがなかったので、大学では様々なことに挑戦して知識や経験を増やしたいと思い、今回の実務体験プログラムに参加した。

私は今回実習をするにあたって横浜市に住む外国人と交流し、横浜における多文化共生について考えるということをテーマに活動した。

国際交流ラウンジでの学習支援では、様々な国にルーツを持つ小中学生の学習支援に参加した。そこでは、日本語がすらすら話せる子どももいれば、日本語を読んだり、書いたりすることがまだ難しいという子どももいた。そのため、同じ問題でも教える子どもによって理解度が違うので、その子にはどのような説明をすれば理解してもらえるかを考え、毎回試行錯誤しながら取り組んだ。勉強の時間が終わると、子どもたちと絵を描いたり、カードゲームをしたりしてコミュニケーションをとった。国際交流ラウンジに来ている子どもたちが楽しそうに遊んだり、先生と話したりしている姿を見て、子どもたちにとって国際交流ラウンジは安心できる大切な居場所であることがわかった。

国際交流ラウンジでの学習支援を通して一人一人に合ったサポートをするには、子どもたちとの日頃のコミュニケーションから、その子どもの特徴や得意なこと・苦手なことを知り、お互いに信頼関係を築くことが大切だと思った。このことは、私が将来、日本語教員として日本語教育に携わったときも共通して大切にすべきことだろう。今後も今回参加した学習支援は続けていくので、子どもたちとのコミュニケーションを大切にし、サポートの仕方とサポートする際の考え方を学んでいきたいと思う。

2 月 17 日には日本丸メモリアルパークの訓練センターで行われた「SDGs 多文化 CITY フォーラム」というイベントに参加し、SDGs や多文化共生のために世界中で活動している団体の講義を聞いた。今回はコロナ後の開催ということもあり、規模は例年より小さかったが、様々な年代層、国・地域の方が会場に訪れ、お互いの活動について質問したり、異文化交流をしたりしている姿を見ることができた。中には高校生や大学生など私と同じ世代の方々の発表

もあり、非常に勉強になったし、私も頑張ろうという原動力になった。

多文化共生や SDGs という今話題の世界的なテーマで、難しい課題も多いが、「SDGs 多文化 CITY フォーラム」のようなイベントがあることで、多文化共生や SDGs についてより身近に考えることができるし、世界中で活動している団体、イベント参加者がイベントを通して繋がることができる。そのような繋がりが今後、世界的な課題を解決する一歩になり得る。そのため、多文化共生や SDGs について考える際に人々が繋がり、学び合えるイベントや講座の存在の大切さを実感した。

さらに今回の実習では、ウクライナ避難民の方々の支援事業にも関わることができた。私は今まで、ウクライナの方と接点がなかったため、ウクライナとロシアの戦争はニュースで見ぐらいでありあまり身近に感じていなかった。しかし、ウクライナ交流カフェ「ドゥルーズィ」で行われた衣料品配布の際にはウクライナ人スタッフの方が戦争の時の様子や日本での暮らしについて教えてくださった。また、横浜には多くのウクライナの方が避難してきているということを知った。

「在日外国人」といっても日本人と結婚して日本に来た人もいれば、働きに日本に来た人もいるし、紛争やテロなどで危険な地域から避難してきた人もいる。だから、「在日外国人」というように一括りに考えるのではなく、個人として捉え、一人一人にそれぞれの事情や思いがあり、日本に暮らしているのだということを忘れていけないと考えた。

私はこれらの実習を通して、言葉が異なっても通じるものがあることを学んだ。例えば、国際交流ラウンジでの学習支援で、中国から来た小学校 5 年生の男の子から平仮名で書かれた「たなばた」が何かわからないという質問を受けたときのことだ。私は漢字で書いたら伝わるかなと思い、漢字では「七夕」と書くことを教えたところ、「あっ、これ中国にもあるよ」と「たなばた」が何かすぐに理解してくれた。このことから、中国と日本の文化や人の交流の深さと繋がりを見つけることができた。

また、ウクライナ避難民の方に向けた支援金配布のときには、私はウクライナ語で書かれた案内カードをもって受付で提示し、身振り手振りで案内をしていただけだったが、支援金を受け取り終わった後、ウクライナの方々が私に向かって会釈をしてくださったのが非常に嬉しく思い出に残っている。

このように、使う言語は異なっても文化や人の交流による共通点、身振り手振りだけでも一生懸命伝えようとする気持ちは通じるのだなと思った。私は今まで、外国の人と話すときに英語でも通じなかったらどうしようと思い、あまり積極的に話せなかった。しかし、言葉が違うから通じないと考えるのではなく、日本や私自身との繋がりは何だろうと探してみたり、身振り手振りや道具を使って何とか伝えてみたりすることが大切だと気づいた。そうすることで、意外な共通点が見つかり、私の伝えたいことが伝わるかもしれない。だから、これからは自信がなくても積極的に話してみようと思った。

約 2 か月という短い期間だったが、私はこの実習を通して、様々な人と出会い、多くのことを学んだ。今回学んだことを今後の人生に活かすために私は次のことに挑戦していきたい。まず、大学では日本語教師の資格取得に向けて勉強を頑張りたい。また、実習を通して移民・難民問題について興味を持ったので、グローバル化と人の移動に関する授業を取って移民・難民問題について学んでいきたいと思う。次に、国際交流ラウンジでの学習支援に今後も参加し、

子どもたちと信頼関係を築けるようにコミュニケーションを取っていききたい。そして、外国にルーツのある子どもたちの教育について考えていきたい。最後に、今回は横浜市の多文化共生について学んだが、私の地元ではどのくらい外国人住民がいて、どのようなサポート体制が整っているのかを調べてみたいと思う。さらに、私は今回の実習で様々な多文化共生やSDGs、国際協力についてのイベント・講座に参加したが、これはたくさんの在日外国人、国際機関がそろっている横浜だからできることが多いのではないかと考えた。そのため、今回学んだことを基にさらに多文化共生や国際協力について視野を広げ、将来、私のような地方出身の学生にも国際協力を身近に感じてもらえるような活動をしてみたいと考えている。

新しいことに挑戦することは決して簡単なことではないが、自分にできることは何か考え、失敗と挑戦を繰り返しながら、将来に繋げていきたいと思う。



## ボランティア活動報告 (カラバオの会)

日本語日本文学科 2 年

### 何故ボランティア活動を行ったか

1 年後期に受講した共生のフィールドワークという、ボランティア先に弟子入りし、受講期間中は週に一度弟子入り先の団体でボランティア活動をするといった授業で私はカラバオの会に弟子入りをして半年間活動していた。授業でいくつかの団体が紹介されたが、カラバオの会では 1 つの活動だけをするのではなく、外国人についての問題を幅広く対応している団体のため、1 つの活動をしながら様々な体験をすることが出来るということに魅力を感じ、カラバオの会で活動することを決めた。活動期間中、子どもたちへの学習支援だけでなく、国会へ行き院内集会・省庁交渉に参加したり、タイのコミュニティーに参入し、タイのお祭りに参加したり、伊勢佐木町に多くあるタイのマッサージ店に食料を配るセカンドハーベストという活動に参加させていただいたりと様々な経験をした。共生のフィールドワークの授業が終わっても、カラバオの会で活動を続けさせて頂き、もっと様々な活動を体験したいと考えるようになった。また、私は日本語教育学について興味を持っており、カラバオの会は外国人についての様々な問題を取り扱う団体であるため、授業が終わってからも活動を続けた。

### 当初の自分の目的を達成したか

私はこれまでの活動で「一人一人に寄り添うこと」ということを目標として設定していた。また、共生のフィールドワークの授業の目的であった「共生とは何か」ということについて更に考えを深めたいと思った。「一人一人に寄り添うこと」という目標は生徒の数が少人数であることなどという環境だからこそ、この学習支援で行うことが出来た目標であったと思う。この目標を達成させるために私は 2 点意識していたことがある。「一回の学習支援に来てくれた子の良いところを 5 つ以上見つける」ということと「話したくなさそうな様子の時はその内容を絶対に無理には聞き出さず、私からはその話題を今後話さないようにする」という 2 つのことだ。1 つ目の「良いところを 5 つ以上見つける」ということについてだが、日本語での会話が苦手な子はなかなかどのような性格の子であるか分からず、来てくれた一人一人のことをよく知りたいと思っていた私は、「良いところを 5 つ以上、一回の学習支援で見つけていったら、その子の良いところは勿論のこと、どのような性格の子であるかということが分かるようになるのではないか」と考えた。3 回目の学習支援から継続した結果、来てくれた子の良いところや、どのような性格の子かということがよく分かるようになり、それを活かして一人一人に対しての接し方を変えてみたり、話す内容を意識してみたりと工夫することが出来た。2 つ目の「話したくなさそうにしている様子の時はその内容の詳細を無理に聞き出さず、私からはその話題を今後話さないようにする」ということについては、この学習支援の場を、家でも学校でもない、第三の居場所のように感じてほしいと思ったからである。私の小学生の頃を振り返ってみて、小学生の頃は視野が狭く、自分の居場所は家と学校と習

い事などの数少ない居場所しか存在していなかったように思う。そこで、学校や家で辛いことがあった時にどこにも自分の居場所がないと感じてほしくなく、この学習支援の場にも自分の居場所はあるからと思うようになってほしいと考えた。一人一人に寄り添うためには学習支援の教室を「学習するための場」ではなく、家・学校の他の第三の場と思ってもらえるようにすることが目標を達成させるために必要だと考えた。これらの行動が学習支援に来てくれる子にとって、居心地の良い場所として捉えてもらうためのものとしての役割が果たされていることを願う。私なりに一人一人に寄り添うことが出来たのではないかと考える。第二の目標として設定した「共生とは何か」ということについては、自分なりに「共生」とは何か考えることが出来たと思う。自分にとっての「普通」という枠を相手に押し付けようとするのではなく、国籍や文化の違いなどを受け入れ、相手を尊重し、常に相手の気持ちを考えて行動することではないかと思った。私達は無意識のうちに自分自身の価値観を相手に押し付けてしまい、相手がその価値観の型にはまらない場合、その相手が間違っていると思ってしまいがちのような気がする。だが、そのように優劣を決めるような考えはもちろん間違っている。それぞれ素敵な価値観や背景を持っていて、「どちらが正しい」ではなく、「どちらも正しい」と考え方を少し変えてみると相手を尊重することが出来るようになり、差別や偏見などで生まれる悲しい出来事が減り、お互いに生きやすい社会になっていくのではないかと考えた。また、常に相手の立場に立って考えてみることで、初めてわかることもある。私は生まれも日本で日本語でしか育てられてこなかったため、学習支援に来てくれる子の日本語についての悩みやその苦しみが想像でしか考えることが出来ない。実際には想像する何倍もつらいものかもしれない。だが、想像しなければ気づけないことや、想像したからこそできることは多少あると思った。子どもの学習支援の活動の後に活動していた中国から来日された女性への学習支援では、この学習支援でどのように勉強していきたいのか、どのような力（話す力など）を主に身につけていきたいのか事前に話し合い、希望に沿った授業ができるように心がけた。

### 活動において発見したことは何か

活動している中で自分の視野の狭さを痛感した。この活動で体験したほとんどのことは初めての体験ばかりで、カラバオの会に相談に来られた方のお話をお聞きする中でも、私の考えたことが無かったことが多く、毎回自分の視野の狭さを痛感していた。カラバオの会での活動で、相手の気持ちを100%理解することはできないが、話を聞いて一緒に考えたり、想像したりすることは私にもできるので、自分にできることを精一杯して相手を知ろうとする意識を持つことがとても大切であると学んだ。

### この体験を通して何を得たか

多くの新たな学びを得ることが出来たが、その中でも自分にとっての「普通」という枠を相手に押し付けようとしないことが大切だという学びを得られてよかったと思っている。自分にとっての普通は相手にとっては異常かもしれないということを常に持つことが出来れば、勝手な偏見から起きる齟齬などが生じることなく互いに傷つくリスクも回避できると感じた。

## 自己について

先ほども述べたが、この活動で自分の視野を少し広げることが出来たと考える。この活動で楽しいことも多かったが大変だと感じることも少なくなく、苦勞した場面が多くあったため、ここから得る学びが多くあった。ここで得た学びを活かしていけるよう努力したい。

## この体験を踏まえ今後何を行いたい

私は日本語教員の資格を取得したいと考えている為、この活動での経験を活かして今後実習や日本語教員養成講座などを受講し、より考えや学びを深めていきたいと考える。また、日常生活でもこの活動で培った視野を広く見ることができるよう意識することなどは応用して使っていくことが出来ると思うため、しっかりと活かしていきたい。

## 参加したボランティア活動（団体）に関しての提言

カラバオの会での活動は学習支援のみだけでなく、幅広く外国人についての問題を取り扱う団体であるため、他の日本語教室や学習支援のみを行う場では体験することのない貴重な経験をすることが出来た。だが、大学生のボランティアが少ないという現状や、どのような活動をしているのか周囲に住む外国人に広まっていないという問題があり、これらの問題を解消するためにはもっと SNS を使ったり、周囲に宣伝したりして広く伝わるようにしていく必要があると感じた。

## 自己評価

今までの活動を振り返って、私一人で担当させていただいたことも多く、その分悩んだり責任を感じたりと大変だと思う部分があったが、それを上回るくらいにやりがいや楽しさを感じていた。また、学習支援以外にもタイのお祭りに参加させていただいたり、国会に連れて行っていただき在留資格のない外国人の生存権を求める院内集会と省庁交渉に参加させていただいたりと貴重な経験をさせていただいた。そのような貴重な経験をさせていただいて、私の視野を広げることが出来た。また、今まで日本語教育について興味を持っていながらも、実際に自分で経験させていただくと、思うようにいかないことも多くあり、実際に自分で体験しないとわからないことを得ることが出来、貴重な経験をさせていただいて、本当に良かったと思っている。また、この活動で自分自身が成長できたのではないかと感じた。ほとんど初めてのことばかりで大変だったと感じたことも少なくなかった。だが、活動の中でやりがいを感じたり、嬉しさを感じたりした場面が多々あり、至らないところが多くあったとは思いますが、私なりに頑張って活動させていただけたかなと思う。私は今後もこの活動を続けさせていただきたいと考えており、今後より良い活動にしていけるよう、もっと様々な知識をつけていきたい。

## ボランティア活動報告

国際交流学科 4 年

### ボランティア活動を行った理由

私は母語支援ボランティアや市民通訳ボランティアとして活動しました。これらの活動を選んだ理由は、通訳スキルを向上させたいという目標を持っていることや、人見知りを克服したいと願っているからです。

中国では、他人に優しくすることを悪いことのように感じる人がたくさんいます。中国にルーツを持つ子供たちの学習をサポートすることで、私自身のスキルを向上させるだけではなく、優しさのバトンタッチをするのに絶好のチャンスとなると考えました。

それから、横浜市の各区から絶えなく依頼が来るので、できるだけ断りたくないのも活動を続けてきた理由の一つです。

### 当初の目的の達成

私の目的は、通訳スキルの向上と人見知りの克服でした。このボランティア活動を通じて、私は自分自身の成長を感じることができました。授業中に通訳を行いながら、自信を持って子供たちをサポートすることができました。この経験によって、自分の目標を達成できたと感じています。今は相手が管理職であっても、自分のほうが正しいと思うときは、怖めず臆せずに自分の意見を言えるようになりました。

### 活動において発見したこと

この活動を通じて、私は日本語を習ったことのない子供たちが必ずしもクラスで孤立するわけではないことに気づきました。彼らはクラスメートとのコミュニケーションを通じて友情を築き、楽しく学ぶことができていました。しかし、通訳の支援がないと、授業が円滑に進むことは難しいということを各学校の先生から聞いています。

それから、受け入れ先の担当者は私より年上だが、彼らが言っていることや思っていることが必ずしも正しいとは限らないことに気づきました。活動の中で違和感を感じたらまずその受け入れ先の管理職の人に相談すべきだと思いました。それでも解決しなかった場合は、迷いなく上の機関に相談すべきです。今回は一部の学校で理不尽な扱いを受けたが、教育委員会に相談したらすぐに対応してくれました。

### この体験から得たもの

この体験を通じて、いくつかのことを得ることができました。まず第一に、コミュニケーション能力が向上しました。通訳は聞き手と話し手の橋渡し役となるため、コミュニケーション能力は非常に重要です。生徒やその保護者、外国人市民との関係性を理解し、適切な言葉で円滑に会話を進める配慮が求められました。第二に、表現力や理解力が向上しました。日本語独特の言い回しを理解し、それを的確に言い表すことができるようになりました。第三に、日本の義務教育の教科（社会、理科など）の知識も身につけることができました。

また、一期一会とは言え、担当する児童や生徒と友達になることができました。私は中国北京出身だが、ボランティア活動で中国の南の方出身の子供とたくさん出会えました。自分とは違うバックグラウンドを持つ子供と共に学んだことは、自分にとって刺激的で良い経験でした。

このボランティア活動を通じて、私は自身の貢献の重要性を再認識しました。自分の能力や時間を使って他人を支援することで、自己成長も果たせるということを実感しました。

それから、すぐれた才能がある者は、どこにいても価値を発揮できるということを再認識できました。今回のボランティア活動の受け入れ先の一部の担当者は、お世辞でも良い仕事をしているとは言えず、一緒に働くのが辛かったので、履修のこともありながら、きっぱり活動を断ったこともありました。しかし、ありがたいことに日頃の働きが評価されているため、すぐにほかの学校から依頼が来ました。小中学校の学期末が近づく最近では、毎日通訳ボランティアの依頼が届いています。そこで、自分を安売りしないことの大切さを学びました。

## 自己の発見

この活動を通じて、自分についてもいくつかの発見がありました。まず、子供たちから好かれる傾向があることを発見しました。また、義務教育レベルの教科の通訳であれば、事前に資料を用意せずとも十分に対応できることもわかりました。

## 今後の展望

今後も通訳ボランティアとしての活動を続け、さらなる経験を積みたいと考えています。特に個人面談などでは、スピーカー（担任の先生）の話が長すぎる場合でも、中断させることができるようになりましたが、今後はそうした状況に頼らずに対応できるよう、ノートテイキングのスキルをさらに磨いていきたいと思っています。

## 提言：参加したボランティア活動に関して

私の派遣元である国際交流ラウンジのスタッフさんは非常に親切でしたが、受け入れ先の担当者については必ずしもそうではなかったです。今後の活動において、受け入れ先の担当者との円滑なコミュニケーションを確保するために、より良い連携や情報共有を期待したいです。

現場に行く前に担当者と連絡を取る必要があるが、小中学校の場合、担当の先生は職員室にいない時が多く、連絡が取りにくいことがありました。各区の国際交流ラウンジからの依頼を電話にて承諾後に、メールで案件の詳細を送られるようになっています。担当者の連絡のつきやすい時間帯もこのメールに書いていただけると、我々ボランティア側も助かると思います。

それから、前述の通り、残念ながら受け入れ先の担当の教師は必ずしも親切ではありませんでした。具体的には、T校では、職員室で待機することができず、しかも最初は待機する部屋も用意してもらえず、真冬に寒い廊下で震えながら待っていたことがありました。T校の担当者の対応も冷たく、自分が通訳ボランティアの担当者であるにもかかわらず、私が直

接副校長と話すことを求めました。副校長と相談した結果待機部屋を用意してくれたが、毎回ひどい態度を取る担当者と顔を合わせることが辛く感じ、T校での活動をお断りしました。一方、M校の担当者は人当たりこそ良かったが、やり取りの内容はなかなか覚えてくれませんでした。M校の担当者とは、メールではなく、対面や電話でやり取りをしていました。残念なことに、会話での連絡事項を全くと言っていいほどに記憶してくれませんでした。例えば、M校の担当者から電話で木曜日に活動することを依頼され、私もそれを承諾したが、いざ約束の時間に教室に行くと担任の先生が私を見ると驚いた様子で、担当者本人も私が承諾したことを覚えていないということがありました。人間は誰しもミスをするものだとは心得ているが、M校の担当者のミスは上記に限らずあまりにも多かったです。

受け入れ先の担当者には最初に大学の「ボランティア活動」という科目を履修していることを伝えています。しかし残念なことに、履修のことで私が簡単に辞められないと見て気が大きくなる人もいます。日本のことが大好きなので、このような人が教員として働いているのは本当に残念でなりません。

## 自己評価

私は横浜市の通訳ボランティアの中で、恐らく誰よりも多くの活動をこなしてきました。周囲からも申し分のない素晴らしい働きをしていたと評価されています。私自身、まさに岸田総理の宝と称される留学生の一人であり、横浜市の宝とも言える存在だと自負しています。

以上が、私の母語支援ボランティア活動における報告書となります。今後も通訳ボランティアとして活動を続け、さらなる成長と経験を積んでいきたいと考えています。

## ボランティア活動報告 (第20回世界をつなぐ国際子どもサマーキャンプ)

国際交流学科 4 年

私は 2023 年 8 月 1 日から 8 月 13 日の 13 日間、BSC ウォータースポーツセンターで開催された「第 20 回世界をつなぐ国際子どもサマーキャンプ」に参加しました。参加した理由は、子どもたちの成功体験を増やすためです。大学で SDGs について学んでおり、教育は持続的な社会を作っていくための鍵だと考えています。子どもたちが自分で考えて行動し、挑戦するという経験を全力でサポートしたいと考え、子どもにとっては長い期間親元から離れて過ごすサマーキャンプで子供たちの成功体験を増やしたい、成長をこの目で見てみたいと思い参加しました。

単刀直入に言えば、当初の目的は大幅に達成しました。当初の目標は「初日より良い顔で帰ってもらう」ことでした。大学時代、プールコーチを半年間しており、その時の目標も「来た時よりプールを好きになってもらう」ことでした。今回設定した目標「良い顔で帰ってもらう」ということも、その子にとって良い経験をして帰ってもらうということです。実際に琵琶湖でサマーキャンプに来る子ども達の顔と帰っていく子どもたちの顔を見てきました。最初は不安な顔をしている子どもたちばかりで、初日の夜には泣いてしまう子もいました。その中でも新しい友だちができたり、新しい体験をしたり、自分の中で感じたことのない感情も生まれたと思います。それが良い方向にいくサポートをしたと自分の中では思っており、その結果は帰る時の子どもの顔に思いっきり出ていました。初日大人しかった子が新しい友だちができて別れを惜しんでいたたり、お母さんやお父さん、おじいちゃんおばあちゃんに会った時にすぐさまキャンプの話をはじめていたりしているところを見た時、私はこのサマーキャンプが無事終わったんだな、と実感しました。「目的を達成できたのか？」と不安になる余地もありませんでした。保護者の方の不安も吹き飛ばすほど、子どもの顔は口ほどにものを言っていました。サマーキャンプでの経験はサマーキャンプの期間のあの琵琶湖だけで完結せず、これからも彼らの中に生き続けていると考え、「参加してよかったな」「自分の目的を大幅に達成しすぎてしまったな」と感じます。

その中で、この活動で発見したことは、子どもへの観点と自分への観点の二つあります。一つ目に発見した子どもへの観点は、子どもは自分の周りの状態に機敏に反応し、考え行動できるということです。子どもたちはサマーキャンプに参加した数日で、様々な経験をしました。いつもと違う環境で、知らない人も多く、慣れないことばかりだったはずですが、その中で、常に子どもたちは自分なりに考えて活動していたように感じました。私ができるのはその気持ちや決断に寄り添う事だけでした。それ以上はしてはいけないと考えています。失敗をしないことこそが“成功”なのでしょうか、私はそれは違うと思います。どんな結果になったとしてもそれは失敗じゃないし、考えて行動したこと、そのものを私は尊重したいからです。最初に私が言った“成功体験”はただ良い結果が得られたという成功体験ではなく、新しい自分になれた成功体験です。今回のサマーキャンプでなにかに挑戦し、なにかを考えるきっかけになった子どもも多いと思います。何かに挑戦するということは、挑戦

する前とは違う自分になれることです。子どもたちはこれからの人生で、たくさんのことに直面し、挑戦していくと思います。その時に、今回のサマーキャンプでの経験を思い出して欲しいです。「君たちの挑戦は絶対に次につながっている」と私は断言できます。二つ目に発見した自分への観点は、計画を立てるのは苦手だが、その場で臨機応変に対応し、次の行動に繋げることが得意だということです。自分の特性として、「やってみなきゃわからない」という気持ちが強くあり、まだ始めていない段階で計画を立てるより、始めてみて頭の中で全てを俯瞰してみて、次やるべきこと、他の班と調整することがスムーズにできました。自分の中で3泊4日、天候の事情を除いて完璧にプログラムを進行できた回があり、その時の子供たちからメッセージを帽子に書いてもらったり、手紙をもらったりしたことで、結果に結びついたんだな、と実感しました。子どもたちからも信頼され、最高のプログラムを提供できました。この力はこれからも社会に出た際に活かしていきたいと思います。

参加したボランティア団体に関しての提言としては、社員同士の連携についてです。私が宿直当番だった際、全員が寝ている大部屋のトイレがひっきりなしに使用され、そこから漏れた光がトイレの近くで寝ている子どもたちの睡眠を妨げてしまったことがありました。それが原因となり、ちょうど私の班の女の子が体調不良になってしまいました。どうにか改善できないかと社員さんにお伺いして対策を練っていると、校長先生（キャンプ全体を学校にみたててリーダーを「校長先生」と呼んでいた）が「それは次の宿直当番のインターン生が考えることであって、のんたん（私のキャンプ中のニックネーム）が考えることじゃない。余計なことをするな」と言われました。インターン生の成長を考えての校長先生の発言だと理解しました。ですが実際に体調不良者が出ていることを伝え、その子だけ体調不良者が寝るための部屋に寝泊りさせていただくようお願いして、その子の体調は次の日には回復しました。台風対策のため、いつもとは違って大部屋で子供が全員寝る方式をとったのですが、これからも起こる可能性がある事態なのに、みんなで考えずに次の当番に任せるというのはいささか乱暴なのではないかと考えました。台風はある程度夏の時期に来ると分かっているので、緊急時用のマニュアルを作成して欲しいとも思いました。1日、風が強く午後のプログラムが中止になり、インターン生が自分たちの授業をすることとなりました。私たちインターン生の成長の機会を提供していただいているのは重々承知なのですが、お金を払っている子どもたちを不安にさせるようなことはしたくないので、そのあたりのマニュアル化をしていただきたいと思います。

ボランティアに参加する前では、自分は「先を見て行動する」ということが苦手だと認識していましたが、今回のボランティア活動で「常に先をみて行動し、チームで支え合う」という力が磨かれました。その力が磨かれたのは、子どもたちの大切なサマーキャンプの思い出をより良くするために、自分ができる最大限をしたいという気持ちからだったと思います。やはり自分は、自分のスキルや経験を使って、他の人の自己実現のサポートをすることが好きだと感じました。これからも他の人の成功体験のきっかけを作っていきたいです。自分自身も成長した気がしますし、これから社会にでていくので、自分自身だけではなく、同僚や会社、全てのお客様が幸せになってもらえるお仕事をできれば良いなと考えています。教育は持続的な社会の実現の確実な一歩です。教育と同様に、私の中の持続的な社会を実現するための大事な鍵になると考えているのが農業です。私が入社予定の企業は農業に関連してお

り、社会貢献につながることをしたいと思い入社を決めました。私の仕事が持続的な社会の実現につながっていると意識しながら、新社会人として働いていきます。

「のんたんコーチ」はみんなのサマーキャンプ中の最高のパートナーになれていたと思います。私はこの2週間、子どもたちのコーチになれて本当に幸せでした。

## 来室者アンケート

### アンケート結果（ボランティアセンター来訪者）

2023 年度、ボランティアセンターを通じて情報収集や相談を行った学生総数（実数）はオンラインを含めて 89 名となった。ボランティアセンターでは、初回来訪時に相談票記入時に、どのような分野の活動に関心があるかアンケートに回答をしてもらっており、図 3 以降のグラフが集計結果となっている。（回答者 22 名）

図 1 ボランティアセンター訪問者数（学科別）

単位：人

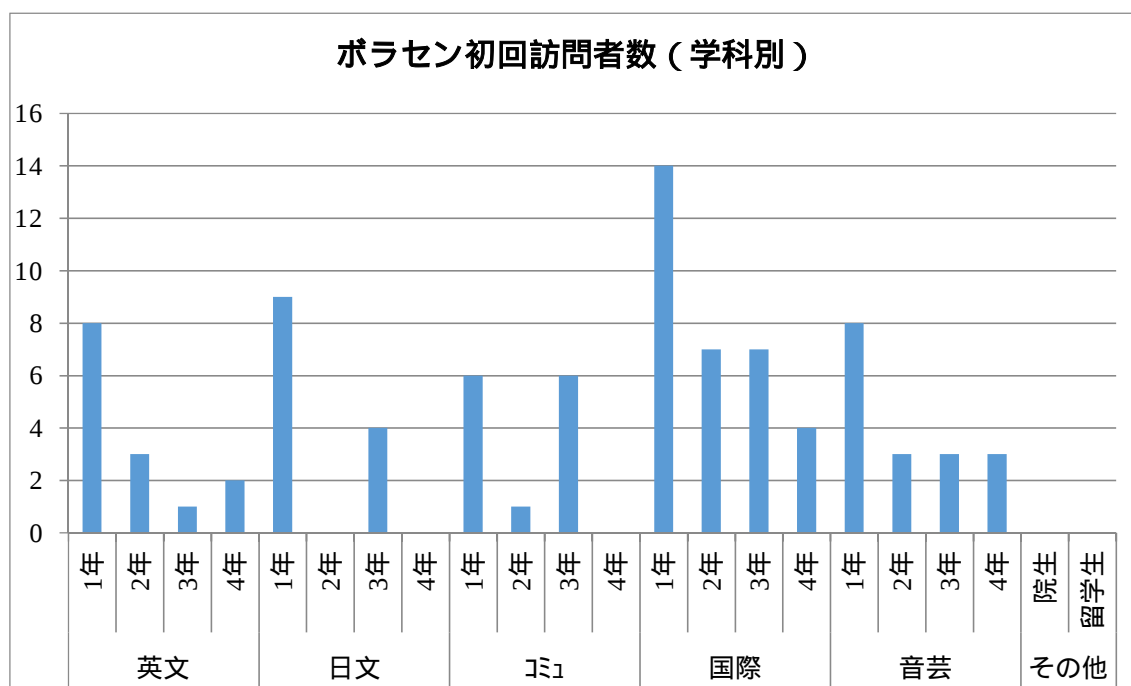
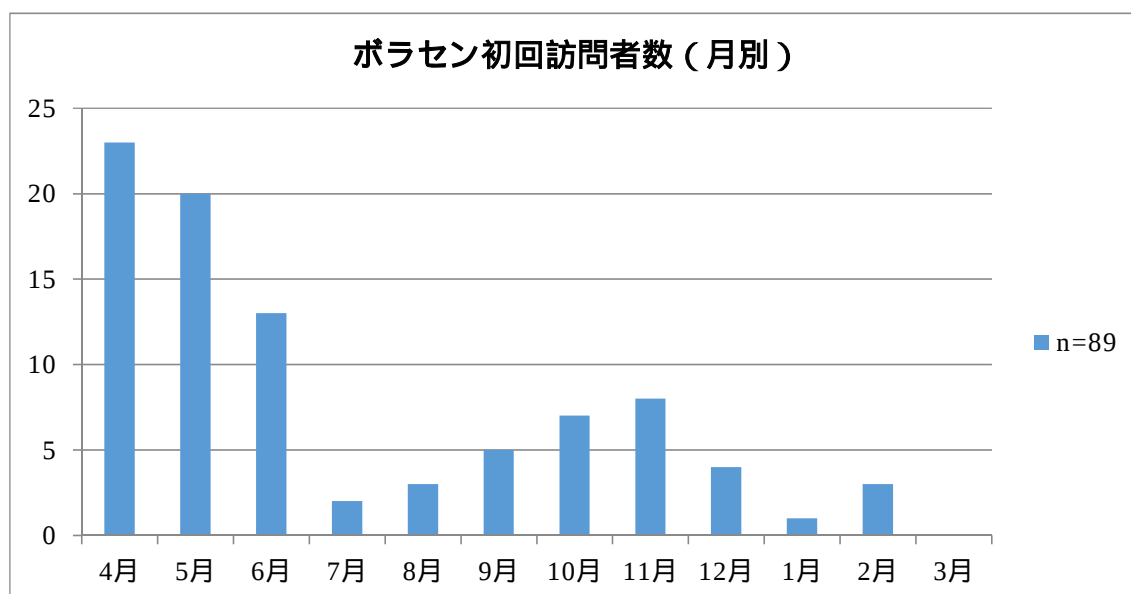


図 2 ボランティアセンター訪問者数（月別）

単位：人



### 国際交流学科の来室学生が多い傾向は変わらず

今年度の学科別来訪者数の傾向は、国際交流学部が全体の約 36%（前年度は 32%）、文学部が 45%（前年度は 45%）、音楽学部が 19%（前年度は 23%）という結果であった。

月別数では、4 月と 10 月にそれぞれ新入生説明会、ボランティア講習会を実施しているため、来室者数が増えている。

### 教育分野がもっとも関心の高い分野に

以下、関心のある分野については、例年は、国際協力、国際交流の分野を合わせた「国際」がもっとも多い分野で、次いで環境、多文化共生、文化・まちづくりが関心が高い分野である。「国際」が変わらず高い傾向は同じであるが、テーマごとでは、今年は教育がもっとも関心の高い分野となった。これは初めてのことであり、今年度の特徴であると言える。

全体を見ても、国際協力の中でもっとも関心の高いテーマは、子どもである。一時期は、フェアトレードへの関心が高かったが、今ではほとんど関心を集めていない。

今年度の傾向としては、「教育・子ども」と「環境」がボランティアに関心あるフェリス生の中では、二大関心テーマとなったと言える。

一方で、これだけ日常的に災害が多いにも関わらず、災害救援支援や防災に関する項目は、むしろ低くなっている。学生からの相談内容を見ても、災害支援はほとんど見受けられない。

図 3 関心のある分野について

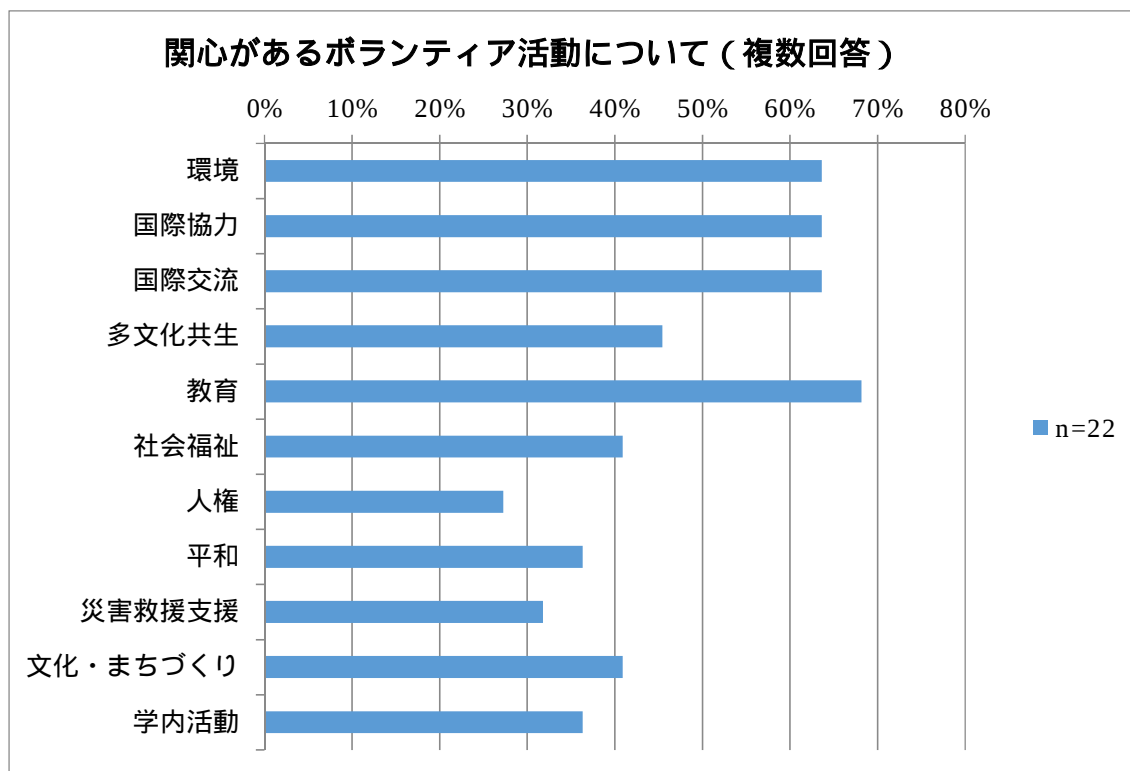


図4 環境の内訳（複数回答）

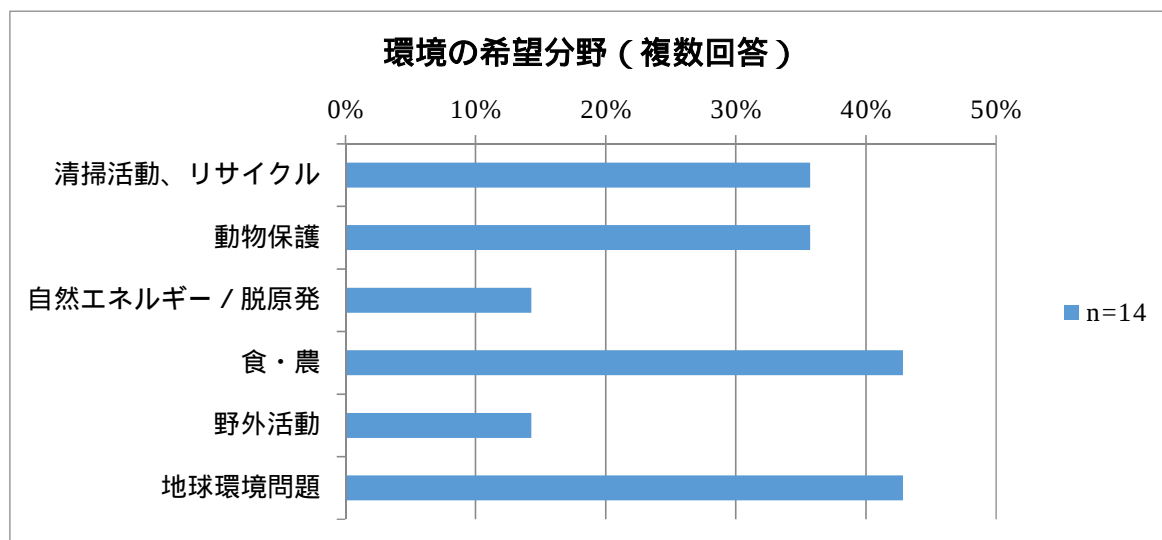


図5 国際協力の内訳（複数回答）

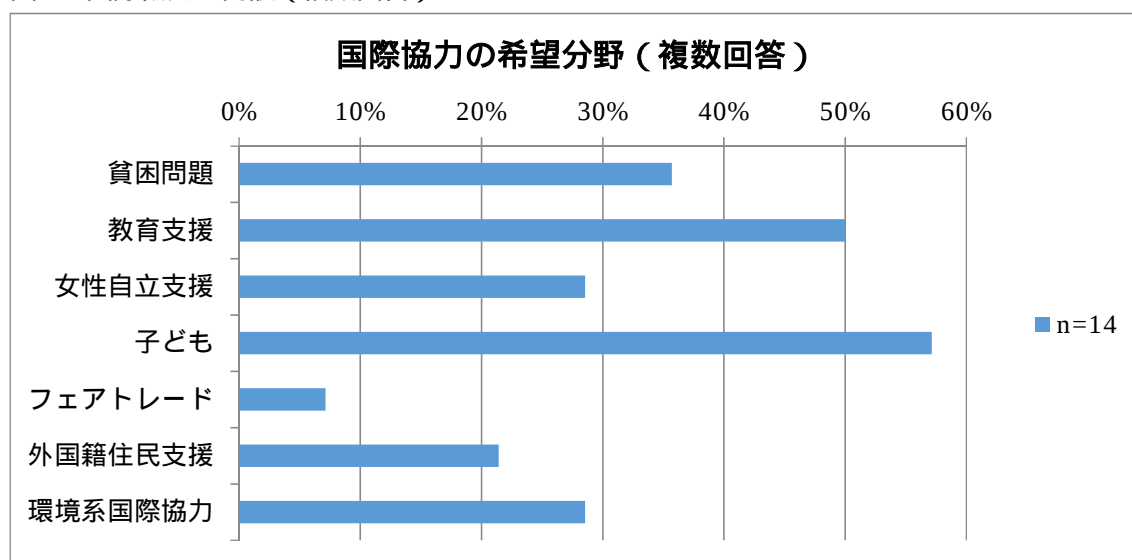


図6 国際交流の内訳（複数回答）

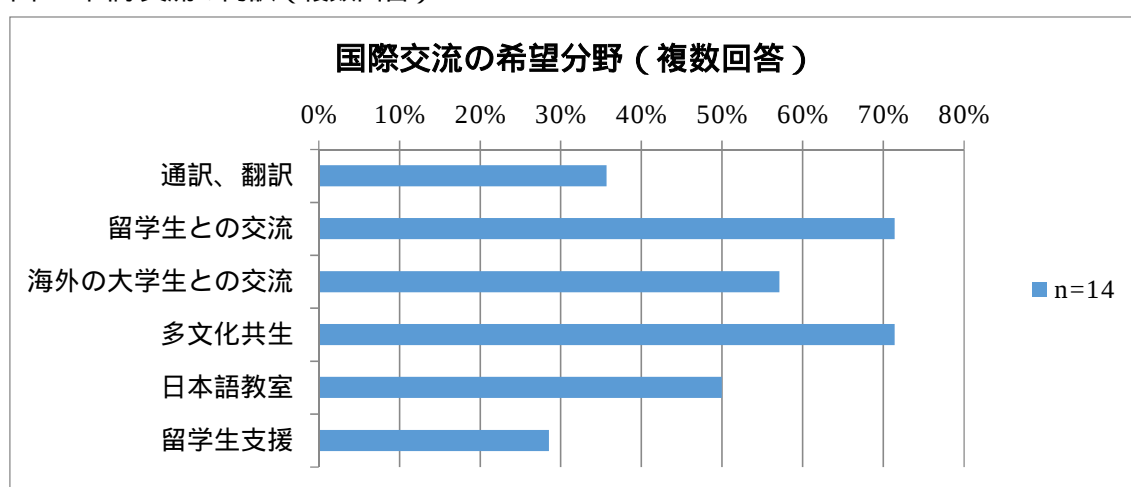
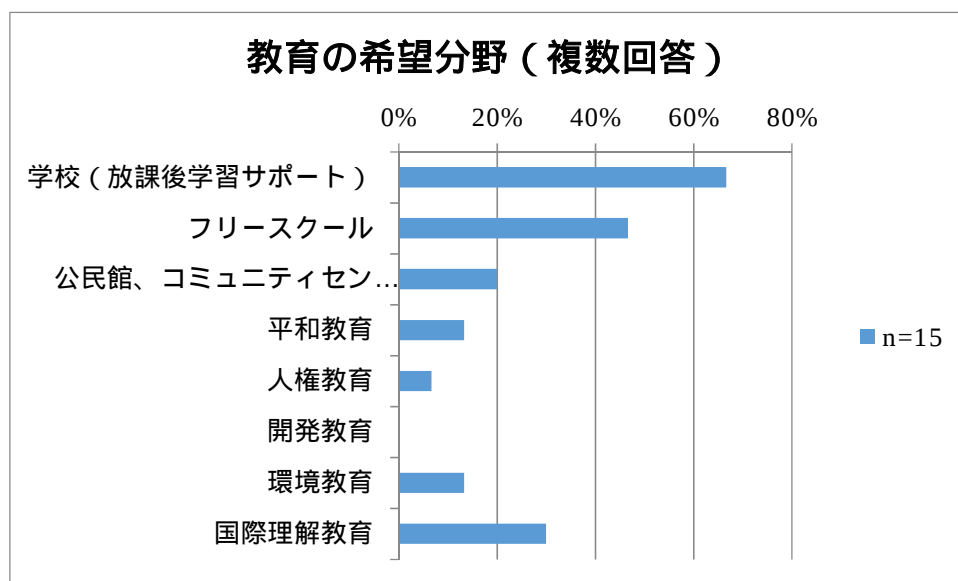


図 7 教育の内訳（複数回答）



# ボランティアセンター資料

## ○ボランティアセンター規程

2003 年 1 月 23 日制定

2007 年 1 月 25 日改正

2015 年 3 月 12 日改正

2007 年 5 月 17 日改正

2016 年 3 月 24 日改正

### （設置）

第 1 条 フェリス女学院大学学則（1965 年 4 月 1 日制定）第 42 条の 2 の規定に基づき、フェリス女学院大学（以下「本学」という。）にボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

### （趣旨）

第 2 条 この規程は、センターの組織運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

### （目的）

第 3 条 センターは、本学の教育理念である“ For Others ”の精神のもと、次に掲げるボランティア活動に係る諸事業の推進に当たることを目的とする。

- (1) 学生のボランティア活動に係る情報の収集・提供、参加機会の紹介に関する事項
- (2) 学生のボランティア活動事業の企画・立案に関する事項
- (3) 学内のボランティア団体への支援に関する事項
- (4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に必要な業務に関する事項

### （センターの施設）

第 4 条 センターは、緑園キャンパスに置く。

### （センターの構成）

第 5 条 センターには、センター長、ボランティアコーディネーター(以下「コーディネーター」という)、センター職員及び学生スタッフを置く。

### （センター長）

第 6 条 センター長は、センターを代表し、その運営等を統括する。

- 2 センター長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。
- 3 センター長は、第 10 条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

### （コーディネーター）

第 7 条 コーディネーターは、センター長を補佐し、センター業務を行う。

- 2 コーディネーターは、事務嘱託 1 名とし、ボランティア活動に経験と見識を有する者をもって充てる。
- 3 コーディネーターは、第 10 条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

### （センター職員）

第 8 条 センター職員は、センター長及びコーディネーターの指示のもと、センター業務を行う。

- 2 センターは、必要により臨時職員を、センター職員として置くことができる。

### （学生スタッフ）

第 9 条 センターは、センター業務の運営に当たり、学生の参加と協力を求めることができる。

2 学生スタッフは若干名とし、公募に応募した本学学生の中からセンター長が委嘱する。

3 学生スタッフの活動期間は原則1年とし、再任を妨げない。

(委員会)

第10条 センターの運営に関する諸事項を審議するため、ボランティアセンター運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

2 委員会に関する事項は、別に定める。

(その他の事項)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

(庶務)

第12条 センターに関わる事務は、コーディネーター及びセンター職員が行う。

(規程の改廃)

第13条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2003年3月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年5月17日から施行し、2007年4月1日から適用する。

附 則

1 この規程は、2015年4月1日から施行する。

2 改正前の第4条関係委員会に関する事項は、ボランティアセンター運営委員会規程で別に定める。

附 則

この規程は、2016年4月1日から施行する。

## ○ ボランティアセンター運営委員会規程

2015 年 3 月 11 日制定  
2017 年 3 月 10 日改正

### （趣旨）

第 1 条 この規程は、ボランティアセンター規程（2003 年 1 月 23 日制定）第 10 条の規定に基づき、ボランティアセンター運営委員会（以下「委員会」という）の構成、運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

### （委員会の構成）

第 2 条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) ボランティアセンター長（以下「センター長」という。）
- (2) 各学部から選出された教員 各 1 名
- (3) 教務部長
- (4) 学生部長
- (5) 国際部長
- (6) 宗教主事
- (7) 大学事務部長
- (8) その他委員会が必要と認めた者

2 委員の任期は、前項第 1 号及び第 3 号から第 7 条までに掲げる委員についてはその職に在任する期間、同項第 2 号に掲げる委員については 2 年、第 8 号に掲げる委員については 1 年とし、再任を妨げない。

### （審議事項）

第 3 条 委員会は、ボランティアセンター（以下「センター」という。）の運営に関し、次に掲げる事項を審議するものとする。

- (1) センターの運営方針に関する事項
- (2) センターの事業計画及び管理運営に関する事項
- (3) センターの日常業務の指針に関する事項
- (4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に関する重要事項及び必要と認められる事項

### （運営）

第 4 条 委員会に委員長を置き、センター長がこれに当たる。

2 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

3 委員会は、定例委員会及び臨時委員会とし、定例委員会は原則として毎年度 1 回開催するほか、臨時委員会は、必要あると認めたときに随時招集する。

4 委員会は、その構成員の過半数の出席をもって成立する。

### （議決の方法）

第 5 条 委員会の議決は出席者の過半数をもって決定し、可否同数のときは議長がこれを決する。

(記録)

第6条 委員会の議事については、議事録を作成し、センターがこれを保管する。

(報告)

第7条 委員長は、委員会の協議の結果を学長及び大学評議会に報告するものとする。

(その他の事項)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が決定する。

(庶務)

第9条 委員会に関わる事務は、ボランティアコーディネーターが行う。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2017年4月1日から施行する。

## 【運営方針 ～大学の理念とボランティアセンター～】

“For Others”の精神のもとで「自立した女性」を育成することは、フェリスの教育目標の一つです。しかしそのためには、授業を受けて試験やレポートでよい点をとるだけでは足りません。むしろ学生たちが、自分から社会に出て行って問題を発見し、その解決のための理念と計画を立て、他の人々と協力しながら行動してゆく能力を養う必要があります。ボランティアセンターは、こうした視点に立って、これまでは学生個人の自主性に委ねられてきたボランティア活動を、大学として積極的にサポートすることを目標としています。これと連動して、2003 年度から「ボランティア活動 1 , 2 , 3 」が単位化されました。

1 . センターは、ボランティア活動を通して、学生と大学、社会（国内と国外）をつなぐ役割を目指します。

2 . センターは、学生が希望する活動領域で、信頼できる活動場所を紹介できるよう、コーディネーターの指導のもとで情報の収集と調査を行います。さらにボランティアに関連する領域を扱う教員、地域の社会福祉協議会や他大学のボランティアセンターとの交流を積極的に進め、ネットワーク化を促進します。

3 . センターは、センターを訪ねる学生たちの自主性を重視し、活動場所とのマッチングに配慮します。また大学と学生が、“For Others”の精神のもとで目的を共有する対等な人間であることを自覚し、学生たちと対話し、問合せや相談に対応します。またモニタリングを行うことで活動中の学生たちを支援し、活動状況を知ることと並んで、活動先で得られた貴重な経験の共有化に努めます。活動が終了した後は、学生自身による自己評価を促し、場合によっては成果を社会に還元するための活動を行います。

4 . センターは、学生参画型の運営を目指します。とくに学生スタッフの募集と育成に努めます。学生の企画立案によるボランティア事業を支援するために、情報と場所を提供します。

5 . センターは、学内のボランティア団体を支援します。各団体の目的と活動趣旨を理解し、ニーズを知るために話合いの場を設け、可能な支援について検討します。

6 . センターは、写真展・講演会・ワークショップなどの催しと並んで、Newsletter の発行、ホームページの作成などによる広報活動を積極的に行います。

センターは、以上のような活動を通して、学生たちが、自分を含む人間や自然の「根源的な尊厳」に対する感性を養い、現代社会の抱える諸問題について「実践的な知性」を育み、そして社会における「市民参画型」の合意形成を促進するためのコミュニケーション能力を身につけてくれることを、場合によっては卒業後の進路につながってゆくことを、また大学が、社会的な貢献度と知名度を高めてゆくことを目指します。

（ 2 0 0 3 年 4 月 確 定 ）

## 2023 年度ボランティアセンター活動実績

### <前期>

4月3日(月)、4日(火) ボラセン・バリフリ合同説明会(Zoom 開催)  
4月20日(木)~5月12日(金) ボランチ開催  
5月9日(火) OG 交流会(オンライン)  
5月19日(金) 学生スタッフ委嘱状授与式  
6月10(土)~11日(日) アジア学院スタディツアー  
6月14日(水) アンネのバラ記念礼拝  
7月26日(水) 演奏ボランティア「Thank you concert」  
8月28日(月)~9月15日(金) 夏季国際機関実務体験プログラム派遣期間  
8月31日(木) 演奏ボランティア@だんだんの樹

### <後期>

9月19日(火) 学生スタッフ研修会事前勉強会  
9月21日(木) 学生スタッフ研修会  
9月22日(金) 演奏ボランティア@泉中央地区社会福祉協議会高齢者サロン「十日会」  
10月7日(土) 演奏ボランティア「こころを彩るコンサート」@テアトルフォンテ  
10月19日(木) 秋のボランティア講習会  
10月31日(火) 海外スタディツアー報告会  
11月3日(金)、4日(土) 大学祭参加  
11月11日(土) アンネのバラ講習会@横浜イングリッシュガーデン  
11月15日(水) アンネのバラ植樹記念礼拝  
11月19日(日) ジョイントコンサート@横浜緑園高校  
12月6日(水) 世界人権デー映画視聴「ガザの素顔の日常」  
12月9日(土) 演奏ボランティア@めぐみ幼稚園  
12月18日(月) 学習支援ボランティア活動ふりかえりの会  
2月1日(木)~3月29日(金) 春季国際機関実務体験プログラム派遣期間

## ・メディア掲載一覧

横浜ケーブルテレビジョン「じもっと！」

放送日：2023 年 5 月 5 日（金）16：00～

内容：アンネバラ育成プロジェクトについて

東京新聞

掲載日：2023 年 5 月 3 日（水）

タイトル：祈りこめたアンネのバラ 横浜フェリス女学院大で満開

読売新聞

掲載日：2023 年 5 月 14 日（日）

タイトル：「アンネ」自由に多彩に 育成 20 年 伝統のバラ コロナ越え満開

タウンニュース泉区版、web 版

掲載日：2023 年 9 月 28 日（木）

タイトル：四季の会×フェリス学生 協働で初のコンサート 作品展に併せフォンテで

タウンニュース泉区版、web 版

掲載日：2024 年 2 月 8 日（木）

タイトル：泉区役所×フェリス 学生目線で「お金のハナシ」 啓発リーフレットを制作

## おわりに

コーディネーター 上條 直美

2023 年度の活動報告書を皆さまのお手元に届けることができ、まずご協力いただいたボランティア受け入れ団体の皆さま、ご関係の皆さまには大変感謝申し上げます。そして活動体験をレポートの形にして寄稿して下さった学生の皆さんには、大学生時代の体験、経験がこれから先の人生においても意味深いものとなるよう願っております。

World Giving Index2023、通称世界人助けランキングという統計が 2010 年より毎年イギリスの CAF(チャリティーズ・エイド・ファンデーション)というところから出されています。「この 1 か月の間に、見知らぬ人、あるいは助けを必要としている見知らぬ人を助けたか」「この 1 か月の間に寄付をしたか」「この 1 か月に間にボランティアをしたか」という 3 つの質問それぞれのランキングを総合して順位がつけられます。質問は、英語の方が伝わりやすいかもしれません。以下の通りです。

Helped a stranger, or someone you didn't know who needed help

Donated money to a charity

Volunteered your time to an organisation

142 か国 147,186 人対象のこの調査で、日本の順位は意外なものでした・・・「139 位」

2010 年の統計でも 119 位でしたからほぼ変わらず下位にあるようです。解説では、「日本のスコアが非常に低い理由は、本質的に文化的なものである可能性が高い。アメリカでは慈善行為として認識されていることが、日本では責任として理解されている可能性が高い」と分析されていました。

自発的な行為であるボランティアは、日本ではみんなが当然行うべきこと、というふうに理解されているのでしょうか。「自発性」「チャリティ(慈善行為)」「寄附」そして「ボランティア」、もっと広げると「市民」「権利・人権」という”西洋的“な概念がなかなか日本に溶け込まないように感じます。かといって日本独自の概念がそれほど共有されているようにも見えませんが。

ちなみにさきほどの統計の上位国は、1 位からインドネシア、ウクライナ、ケニア、リベリア、アメリカ、ミャンマー、クウェート、カナダ、ナイジェリア、ニュージーランドでした。

ボランティアという概念には社会とのつながりで大事なことがたくさん含まれています。学生の皆さんと一緒にこのことを考えていくのも、ボランティアセンターの役割のひとつかもしれません。

2024 年 3 月

2023 年度 フェリス女学院大学 ボランティアセンター年間活動報告書

発 行 2024 年 9 月 1 日

発行・編集 フェリス女学院大学 ボランティアセンター

〒245 - 8650 横浜市泉区緑園 4-5-3 緑園キャンパス CLA 棟 2F

TEL:045-812-8462 FAX:045-812-8467 e-mail:volunt@ferris.ac.jp

<https://www.ferris.ac.jp/life/volunteer-center/news/>

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売することを禁じます。



フェリス女学院大学ボランティアセンター

